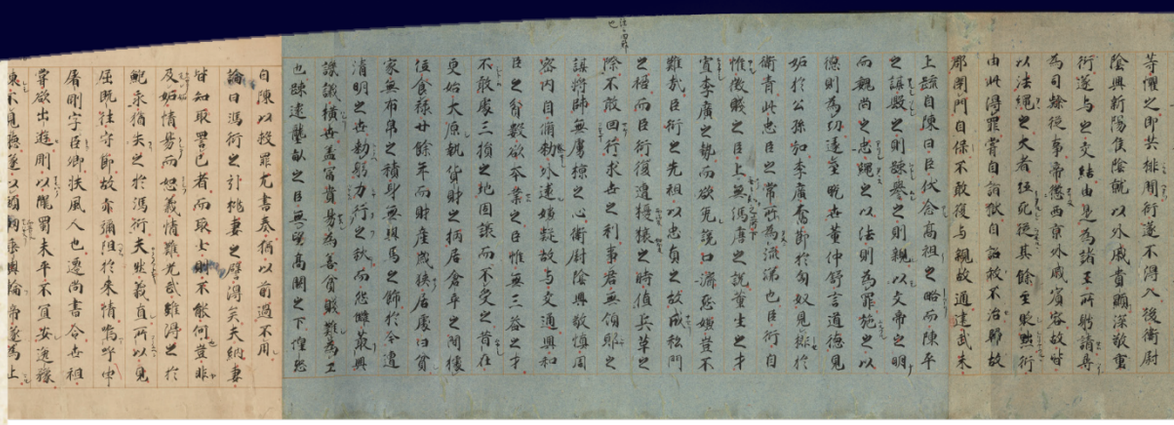
中國典籍日本古寫本の研究

Newsletter　No.Ⅷ

2023.3



目　次

1. 佚存書三態
高田　時雄（1）
2. 日本の藏書家と論語－安田文庫－
髙橋　智（4）
3.『日本訪書志』書き込みに見る内藤湖南書誌學の一端
玄　幸子（11）
4.『王勃集』卷二十九をめぐる二つの疑問―なぜ「爲霍王祭徐王文」を作ったのか。なぜ「常州刺史平原郡開國公行狀」は採錄されなかったのか。
道坂　昭廣（17）

5. 活動記錄　(21)
6. 科研スタッフ紹介　(22)

科學研究費助成金・基盤研究（B）「中國典籍日本古寫本研究の精密化と國際的情報發信」
研究代表者：道坂　昭廣

佚存書三態

高田　時雄

佚存書という名稱は、述齋林衡（1768-1841）の編刊になる『佚存叢書』の書名に由來する。林述齋は美濃國（現在の岐阜縣）にあった岩村藩の藩主松平乘蘊の二男として生まれ、林家七代目林信敬の養子として林家を繼ぎ、大學頭となった。時あたかも樂翁松平定信が老中首座として寛政の改革に着手した頃で、學政の牛耳を執らしむべく、述齋に白羽の矢を立てたものという。國學となった昌平坂學問所では、當然ながら朱子學を標榜したが、述齋自身は必ずしもそれに拘ることなく、考證學にも興味を持っていたようで、『佚存叢書』の編纂などにはそういった志向が窺われる。本叢書の第一册の卷首に置かれる序文は寛政十一年（1799）孟冬月の日付で、最終第六十册の「宋景文公集」跋は文化七年（1824）陽月（十月）二十二日とあって、全册の刊行には前後二十五年を費やしているから、相當に息の長い仕事であったことが窺える。述齋の序に「載籍之佚於彼者不爲尠也，因念其獨存於我者而我或致遂佚則天地間無復其書矣，不已可惜乎」と述べられているように（圖一）、日本には漢土に佚してしまった典籍が存しているが、それが滅びてしまえば天壤間から消え失せてしまうのが如何にも惜しいというのが本叢書撰述の動機であった。

しかし佚存書の公刊はこれが最初ではない。『佚存叢書』以前、享保六年（1721）には太宰春臺『古文孝經孔氏傳』が刊行された。また享保十一年（1726）には足利學校の藏書に基づく山井鼎『七經孟子攷文』の撰述があり、嗣いで享保十六年（1731）には荻生北溪による『補遺』を附して刊刻された。また寛延三年（1750）には、根本武夷『論語集解義疏』が公刊されている。これらの書は中國に傳わり、大きな反響を呼んだ。述齋の『佚存叢書』にはこうした前驅があったのである。さて『佚存叢書』に收める所は總て十六種、それらのうちには、辛文房『唐才子傳』、

佚存叢書序

歐陽永叔日本刀歌云徐福行時經未焚佚書百篇今尚存然所謂百篇之書我無有之則不知其何據豈意度言之耶惟我邦　皇統一姓　神聖相承未始有易姓革命之變而右文之化稽古之風歷千載而彌盛故使凡出於古者今皆不至于廢替也至載籍則非惟本邦古今所有即西土撰著傳到此間輒亦永存不失向使百篇之經果傳於我者我必不使其終散亡矣余嘗讀唐宋以還之書乃識載籍之佚於彼者不爲尠也因念其獨存於我者而我或致遂

佚存叢書序

佚則天地間無復其書矣不已可惜乎於是彙爲一編姑假諸歐詩名曰佚存叢書顧是編所彙唯佚是收不必問其醇疵瑕瑜譬之古器千年外物皆可寶重寧惟夏彝周鼎然後可傳也哉寛政十有一年歲在屠維協洽孟冬月吉天瀑山人撰

圖一：佚存叢書序

崔敦詩『玉堂類藁・西垣類藁』、龔原『周易新講義』、宋祁『宋景文公集』などは紅葉山文庫に藏される五山版や宋刊本に據ったものだが、『五行大義』、『臣軌』、『文館詞林』など過半は日本に傳存する古寫本に基づいている。事實、奈良平安朝以來日本に傳來した典籍はすべて寫本として傳わったものであり、佚存書は寫本として傳えられたものが多いことは言うまでもない。但だ『佚存叢書』の編刊時點では、多くの佚存書がまだまだ發見されていなかった。それらは江戸時代後期から幕末にかけて、狩谷棭齋等のグループによって精力的に調査發掘され、佛典では鵜飼徹定による努力により新たな佚存書の發見が相次いで行われた。とりわけ明治以降には、廢佛毀釋や極端な歐化政策などによって、全國の寺院から數多くの古寫本が流出し、收藏家の藏儲に歸したが、その中には希世の珍も少なくなかった。丁度その頃來日した楊守敬は、森立之や柏木探古の協力を得て、多數の古寫本、古刊本を購得することが出來た[1]。それらのうち佚存書の一部が黎庶昌『古逸叢書』に收錄されたことは誰しもよく知るところである。

日本國内では、明治末から大正にかけて内藤湖南が日本古寫本の文獻的價値を極力稱揚したこともあり、諸家所藏の典籍が識者の耳目を集めるようになった。昭和八年（1933）に刊行された『佚存書目』には、その當時に知られた佚存書の全體像が提示されている。本書は外務省文化事業部の補助、即ち所謂「庚款」による出版であったために、該事業の中心的存在であった服部宇之吉の名を冠してあるが、序に述べてあるように神田喜一郎と長澤規矩也に依囑して編纂したものである。しかし實際にはほとんど長澤の編になるもので、神田はその出來榮えには滿足していなかった[2]。

いずれにせよ現在では日本國内に所藏される佚存書は少なからざる數量に達している。隸古定本『尚書』、『禮記子本疏義』、顧野王原本『玉篇』、『群書治要』、『五行大義』、『天地瑞祥志』、『翰苑』、『王勃集』、『世説新書』、『文館詞林』、『琱玉集』、『冥報記』など、一々數え上げればきりがないほどである。

『群書治要』について言えば、これまで金澤文庫本が全五十卷のうち四十七卷が現存し、宮内廳書陵部の所藏となっていることが知られて來た。それに加えて戰後に九條家本が出現し、東京國立博物館に歸したというような、新たな發見に遭遇することもある。この九條家本は十三卷しかない不全本だが、五色紙に端正な楷書で筆寫された極めて美麗な寫本である。

こういったものを第一類とすることができる。これまでの概念でも、この第一類を一般に佚存書と稱してきた。ところが、一定の分量が保存されている場合のほかに、數行だけしか殘っていないような場合が存在する。古筆切と稱されるもので、「手鑑」に貼り込まれていることが多い。これは日本に特有の事例で、名家の筆跡を觀賞するために、卷子等から數行を裁斷したもので、茶道の流行に伴って掛け物として用いられることもあった。多くが假名書きの古筆であって、漢文のものは少ない。また數行の斷簡であるために、佚存書として取り上げられることは多くなかったように思われる。ただ研究の進展にしたがって、中國古典籍の古筆切にも注意が向けられるようになってきた。例えば、MOA

1　楊守敬よりやや早く、日本傳存の古逸書に注意した人に傳雲龍があって、その『簠喜廬叢書』には佚存書を含み、またその『游歷日本圖經』に附錄された「中國逸藝文志」には彼の知り得た佚存書が掲載されている。ただ『簠喜廬叢書』に西村兼文の僞作した唐刻と稱する「歸去來辭」を收錄したことは後世に汚點を殘したものと言われる。

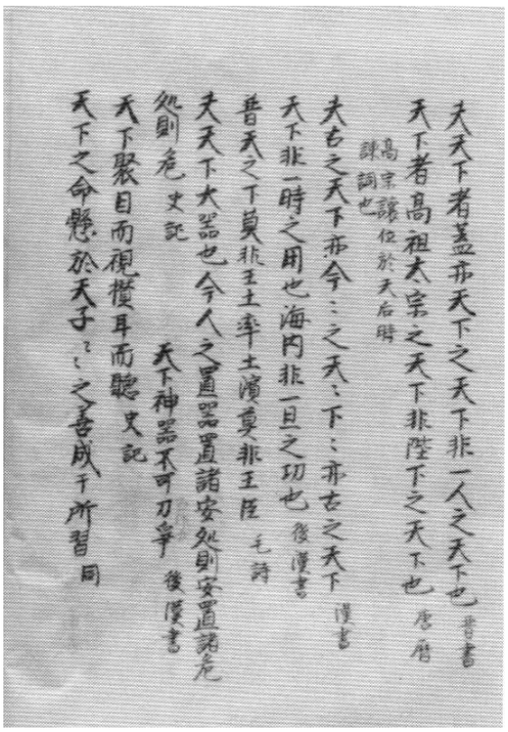
2　神田がその師内藤湖南に宛てた書簡（昭和５年５月 21 日付、關西大學内藤文庫所藏）に以下の通り見える。「この書目は長澤君の原稿をそのまゝ印刷せられしものにて小生は僅に參考材料を提供せしに不過、相當に誤謬の見受けられ候ふて、遺憾に存申候。義淨の大唐求法西域高僧傳を撰人不詳として佚書と考へ候ふなど、誠に滑稽に有之、又慧琳の一切經音義を佚書として著錄せしはよろしけれども、それに西東書房影印本などゝ記し候ふて、一切經音義に玄應、慧林兩家の書あることも不知るものかと被存候。」

圖二：翰墨城

美術館所藏の手鑑『翰墨城』（圖二）に『王勃集』の斷簡が見えるような例がそれである[3]。また筆者自身も楊守敬が日本から持歸った手鑑の中に原本『玉篇』の斷片の貼り込まれているのを見たことがある[4]。こうした斷簡はもと傳存した原寫本から或る時期に切斷されたものなので、やはり第一類に含めて然るべきである。

佚存書の第二類は類書などに引用され、古逸典籍のテキストが傳わっている場合である。一例として柳芳『唐曆』を擧げることが出來る。柳芳は開元末の進士、その『唐曆』は隋末から大曆十三年まで、ほぼ唐代前半の史實を記述した私撰の史書である。日本には平安朝の頃に傳來したらしく、當時の貴紳の日記類に言及されるほか、平安末期の藤原孝範の編纂に係る類書『明文抄』（圖三）には『唐曆』からの引用が少なくない[5]。こういった佚文を拾い集める作業は、『玉篇』や『切韻』など小學書に對して行われてきたが[6]、總合的な試みとして新美寛『本邦殘存典籍による輯佚資料集成』[7]を取り上げておく必要がある。諸書に引かれた文獻には、往々にして古佚文獻が含まれるため、注意が必要である。輯佚の試みは少なくないが、佚存書の視點からもう一度再檢討してもよいように思われる。

最後の第三類は、文獻そのものは中國でも今日まで傳わっているものの、日本に傳存するものはテキストに相違があり、往々故態を留めているような場合である。例えば京都興聖寺や大阪金剛寺の寫本一切經に含まれる道宣『續高僧傳』では、多くの僧傳のテキストが高麗藏經をはじめとする刻本藏經のテキストと較べ、少なからぬ相異の存することがしばしば議論されてきた。『續高僧傳』は著者道宣により貞觀十九年（645）に撰述された後も、道宣自身により、また道宣の示寂後はその法弟たちにより增廣が行われた。とりわけ該書卷四の「玄奘傳」のテキストについては以前より諸家の注目するところであったが、近年藤善眞澄氏が興聖寺本の詳しい分析を行い、そのテキストが貞觀二十三年（649）に成立したものと結論した[8]。つまり高麗藏や福州崇寧藏（東禪寺版）などの刻本藏經所收本は、後に增廣されたテキストであるのに對し、興聖寺などに傳わる寫本大藏經はより古い段階のテキストを保存して



圖三：明文抄、神宮文庫本

3　道坂昭廣「傳橘逸勢筆「詩序切」と上野本『王勃集』の關係」、『書法漢學研究』第 8 號（2011 年 1 月）、のち同氏『「王勃集」と王勃文學研究』（東京：研文出版、2016 年 12 月）の 317-340 頁に再錄。

4　湖北省博物館所藏。拙文「顧野王原本玉篇水部殘卷について」『敦煌寫本研究年報』第 12 號（2018 年 3 月）を參照されたい。

5　太田晶二郎は、『明文抄』及び他の文獻から計 34 條の逸文を拾い集めている。太田「『唐曆』について」、『山田孝雄追憶 史學・語學論集』（1962 年 11 月、東京：寶文館）、のち『太田晶二郎著作集』第一册（1991 年 8 月、東京：吉川弘文館）、70-97 頁に再錄。また『明文抄』については、遠藤光正『明文抄の研究並びに語彙索引』（1974 年 3 月、東京：現代文化社）及び山内洋一郎『本邦類書玉函秘抄・明文抄・管蠡抄の研究』（2012 年 5 月、東京：汲古書院）を參照。

6　岡井愼吾『玉篇の研究』（1933 年 12 月、東京：東洋文庫）及び上田正『切韻逸文の研究』（1984 年 2 月、東京：汲古書院）。

7　「正・續」二册、1970 年 3 月、京都大學人文科學研究所。

8　藤善眞澄『道宣傳の研究』（東洋史研究叢刊之六十、京都大學學術出版會、2002 年 5 月）、とりわけ第六章「『續高僧傳』玄奘傳の成立――卷四・玄奘傳」、第五章「『續高僧傳』管見――興聖寺本を中心に」を參照。

いるわけで、極めて貴重な材料を提供する。これらの古い寫本テキストは落合俊典氏の努力によって陸續公刊され、新たな研究領域が切り開かれつつある[9]。異同の程度は『續高僧傳』ほどではないが、同様の例は『大唐西域記』にも見られる。『西域記』は貞觀二十年（646）、玄奘によって大宗に上呈された後、顯慶元年（656）、于志寧等によって高宗の命を奉じて修訂が加えられた。現在通行する本は、すべてこの修訂本のテキストに據っているが、日本古寫大藏經中のテキストはどうもそれ以前のテキストを傳えているらしい[10]。この第三類は、これまでの定義では佚存書の範疇には屬さないものであろう。しかしながら、佚存書のさまざまな態様を考える場合には、こういったものも視野に入れる必要があるように思われる。試みに第三の類型として提示してみたいと思う。

9　『續高僧傳』についていえば、『續高僧傳卷四・卷六』（日本古寫經善本叢刊第八輯、2014 年 3 月、東京：國際佛教學大學院大學）、『高僧傳卷五、續高僧傳卷二八・卷二九・卷三〇』（日本古寫經善本叢刊第九輯、2015 年 3 月）がすでに刊行されている。兩書に附された諸論考も僧傳テキストの發展を考える上で重要である。

10　拙文「高宗期における『西域記』テキストの變改について――日本古抄本による檢證，國際佛教學大學院大學學術フロンティア「奈良平安古寫經研究據點の形成」主催國際シンポジウム「漢譯佛典研究の新時代」『講演資料集』2008.12.06, 105-119; Takata Tokio, On the Emendation of the Datang Xiyuji during Gaozong's Reign: An Examination Based on Ancient Japanese Manuscripts, Imre Galambos (ed.) *Studies in Chinese Manuscripts: From the Warring States Period to the 20th Century*, Budapest, 2013, 49-58

圖版出處

圖一　國立公文書館デジタルアーカイブ
https://www.digital.archives.go.jp/

圖二　MOA 美術館 HP
https://www.moaart.or.jp/?collections=090

圖三　遠藤光正『類書の傳來と明文抄の研究』（長野縣佐久市：あさま書房、1984 年 11 月）所載の神宮文庫本影印

日本の藏書家と論語－安田文庫－

髙橋　智

提 要

日本に於ける『論語』の受容を、現存する文獻史から俯瞰すると、魏何晏（190～249）『集解』・梁皇侃（488～545）『義疏』と宋朱熹（1130～1200）『集注』に大別される。希少な鎌倉時代（12 世紀末～14 世紀初）の集解古寫本（零本）、南北朝時代（14 世紀中葉）の、7～8 點完存する集解古寫本の一群、降って室町時代（15・16 世紀）の 100 點に及ぶ集解古寫本の一群、また、20 點を超える義疏古寫本類は古寫本文化の粹であり、南北朝時代から室町時代にかけて數回版を重ねた正平版『論語集解』は 20 點以上を存する刻本の嚆矢であり、室町時代末期（17 世紀初）の木活字版『論語集解』（慶長古活字版）はやはり 20 點ほどを遺す集解本の集大成であった。

江戸時代（17 世紀～）からは書肆の出版が盛んとなり、集注本全盛期を迎えた。こうした文獻は、貴族・學僧・武士と受け繼がれ、盛衰を繰り返しながら命脈を保ってきたが、明治時代以降（19 世紀末～）、財閥を中心とした藏書活動によってこの文獻の軌跡が永久に遺されることとなったのである。この意義を鑑みる時、藏書家の收書活動の果たす役割を改めて檢證することも大切であろうと思われる。近代になって『論語』收集に顯著な功績を刻んだ舊安田財閥の領袖安田善次郎の實績をまとめてみることとする。

第一章　安田文庫について

安田善次郎（明治 12～昭和 11＝1879～1936）が昭和時代初期收集した善本で古寫古刊經・古寫本・舊刊本・古活字版等が多く、國書・漢籍に跨る総合的な文庫。

初代善次郎は大正 10 年（1921）9 月 28 日、兇刃に

倒れ、長男善之助が二代となったが、同 12 年 9 月 1 日關東大震災で、本所横綱町の安田邸は燒失、善之助時代からの松廼舍文庫が全燒した。その後、麹町平河町の邸内に收集された主要なコレクションに以下のものがある。二代善次郎はまた、日本書誌學會設立發起人にして、安田邸で例會が催されていた。

○西莊文庫
小津桂窓＝文化 1～安政 5＝1804～1858、伊勢松坂の豪商　《古活字版論語（慶長 14 年＝1609）》

○市島春城舊藏書
市島謙吉・文久 1～昭和 19＝1861～1944、早稲田大學初代圖書館長、古寫經や名家自筆本收集、昭和 11 年（1936）安田文庫へ讓渡

○大槻家舊藏書
大槻如電〈大槻磐溪男・文彦の兄　弘化 2～昭和 6＝1845～1931〉は森立之〈文化 4～明治 18＝1807～1885〉と姻戚關係にあり、大槻家は森家の遺書を受け繼ぐ。森家は澁江抽齋〈文化 2～安政 5＝1805～1858〉の藏書を受け繼ぎ、抽齋は市野迷庵〈明和 2～文政 9＝1765～1826〉・狩谷棭齋〈安永 4～天保 6＝1775～1835〉の遺書を受け繼ぐ。これらが如電没後、安田文庫に入る。市野迷庵は正平版『論語』校勘記により日本の校勘學を確立　《市野迷庵覆刻正平版論語》

○高木文庫
高木利太〈明治 4～昭和 8＝1871～1933〉、大阪毎日新聞社專務、古活字版・地誌の收集で有名。　《附訓本論語正文》

○内野皎亭舊藏書
内野五郎三、事業家、明治 43 年（1910）田中光顯から、キリシタン版太平記等 17 部を讓り受けた。その一が宋版『儀禮經傳通解』（中庸）である。西大寺藩主市橋長昭獻納宋元版 30 部の一つ。田中光顯は内閣書記官長、後、宮内大臣、明治期、内閣文庫の收書に與り、圖書寮に移管。内野氏遺書は昭和 11 年（1936）入札　《儀禮經傳通解（中庸）》《慶長刊要法寺版論語》

○米澤藏書
直江兼續〈永祿 3～元和 5＝1560～1617〉戰國武將、關ヶ原合戰後、南化玄興〈妙心寺學僧〉より善本を贈られる。　《正平版論語單跋早印本》

○賜蘆文庫
新見正路〈寛政 3～嘉永 1＝1791～1848〉大坂町奉行・幕臣。　《正平版單跋後印本》

○御本
德川義直舊藏、尾張德川家舊藏。　《古活字版論語（慶長 14 年）》

《參考文獻》
「安田文庫古版書目」（書誌學 1－5 卷・昭和 7～9＝1932～1934）川瀨一馬
「かがみ」（大東急記念文庫 30～33・平成 4～10＝1995～1998）川瀨一馬・岡崎久司編

第二章　安田文庫收集『論語』

安田文庫が收集した『論語』の稀覯本は、室町時代（15・16 世紀）の古寫本『論語集解』7 本（1 本所在不明）と、同じく室町時代古寫本『論語義疏』2 本、慶長時代（17 世紀初）の刊本 4 本（2 本所在不明）と正平版並びにその覆刻本の計 6 本、更に江戸時代初期（17 世紀）の日本人による訓讀を附刻した經文のみの刻本、また、室町時代に日本人が日本の假名文字のみで書寫した『假名書き論語』と呼ばれる珍しい寫本であった。昭和初期、財團法人大橋圖書館主催の論語展覽会には 27 點出品のうち、實に 9 點が安田文庫の所藏。これらを俯瞰してみても、日本の『論語』受容の根幹をほぼ網羅する極めて價値あるコレクションと言わねばならない。現所在百餘點ほど知られる論語古鈔本の實に約十分の一を占める。ここでは、そのうち古寫本『論語集解』について少しく解説してみよう。皇侃『論語義疏』については、文明 19 年（1487）寫本と室町時代寫本（いわゆる寶勝院本）を所藏した。これらはともに慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫現藏。

このうち、訓讀を附刻した『論語』は、何晏の集解本の經文のみに附訓を施し、讀みやすくしたもので、その訓法は室町時代の清原博士家の流れにある。『和刻本經書集成』（汲古書院）に影印收錄されるものと同じテキストであるが、安田文庫本とは相互に覆刻の關係にある。『假名書き論語』は、『安田文庫叢刊』第一篇（昭和 11 年）に影印收載されている。

古寫本『論語集解』は、以下の 7 本がかつて收藏された。

一、永享３年（1431）寫本―所在不明

二、永祿３年（1560）寫本（高木文庫舊藏）慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫現藏　５册

本書は、高木利太氏の高木文庫から、安田文庫の有に歸したものである。高木氏は明治４年（1871）～昭和８年（1933）の人で、福澤諭吉と同郷、大分中津藩に生まれた。慶應義塾の出身。大阪毎日新聞社専務。古版地誌類、古活字版（日本慶長時代＝17 世紀初＝活字版）の收集は日本隨一で、前者は自らが、後者は川瀬一馬博士が整理、それぞれ、『家藏日本地誌目錄』『高木文庫古活字版目錄』としてまとめられた。しかし、後に各所に分散し、漢籍の古刊本類の多くは安田文庫に引き繼がれた。「高木家藏」（雙邊長方）の藏印は、古活字版の代名詞の如く、今に、威嚴を放っている。本書は、『論語善本書影』（大阪府立圖書館　昭和６年＝1931）の第三十に載せたもので、財團法人大橋圖書館が主催した『論語展觀目錄』の四十六番に著錄されている。このときはまだ高木氏の藏であった。

後補の茶表紙は縹色の元表紙の上に被せたもので、縱 24.1 横 18.5 糎。「論語　一」等と後人の墨書がある。首に何晏の序（３丁）があり、「論語學而第一　何晏集解　凡十六章」として本文が始まる。尾題は「論語卷第一　經一千四百七十字／註一千五百一十三字」等と字數を記す。四周單邊の墨界に７行 13 字、界内の寸法は縱 19.5 横 14.7 糎。界幅は 2.1 糎。小字雙行。全册一筆の書寫に係り、墨付きは第１册（卷 1･2）27 丁、第二册（卷 3･4）33 丁、第３册（卷 5･6）35 丁、第４册（卷 7･8）38 丁、第５册（卷 9･10）26 丁。料紙は楮紙。卷末に「于時永祿三稔　庚／申　五月十七日五十歲　文彦」と書寫奥書がある。本文は、字句の異同から、青蓮王府本と同じ系統に屬し、古い書體の文字を多く使用する様子も、王府本と類似するところから、清家本と一線を畫す寺院系の傳本とみることができよう。

なお、この訓點書き入れは、本文と同筆の、墨による返り點・送りがな・縱點と朱引きである。永祿の頃は、天文の末、清原宣賢が没して程なくのころであり、清家の學問も宣賢の講義を受けた筋等から、次第に自由に流布して行く時代を迎え、本書の訓點受容も、こうした趨勢と無關係ではないだろう。「安田文庫」の藏印がある。

三、室町時代末期寫本、清原宣嘉本　慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫現藏　２册

本書は從來の諸書目に未載である。江戸時代の初期頃に改裝したと見られる縹色の表紙（縱 26.5 横 18.7 糎）に古い題箋を附し「論語何晏集解　天・地」と墨書する。本文の紙質墨痕から想像するに室町時代の中後期、即ち 15 世紀末から 16 世紀初頃の書寫年代ではないかと思われる。古寫本としての風格は上乘と言えよう。首に何晏の「論語序」を２丁附す。卷頭題は「論語學而卷第一　何晏集解」と記し、卷二以降は「論語卷第二　何晏集解」等と篇名を記さず章數も記さない簡單なものとなっている。尾題も「論語卷第一」として第十まで、大小字數等の附屬記述はない。斐楮交漉紙に邊・界を墨書し、７行 14 字注小字雙行に書寫する。界寸は縱 21 横 16 糎、界幅は 2.3 糎。柱には何も記さない。本文の系統を鑒みるに、例えば、「學而」最終章、「不患人之不己知」に本書は「王肅曰但患己無能知之也」の注を附し、この一句は正平版『論語』以後の集解本（とくに清家本）には無いものが多く、『論語義疏』本はこれを存する。これは後述の、清家本以外の古写本に類似する系統を示す例證で、即ち『論語義疏』本の影響を受けたものの系統である。また、爲政篇の第三章「子曰導之：：」を多くの集解本が「導」を「道」に作るのは正平版との一致を示し、逆に、第二十二章の注「小車駟馬車」の「駟」は正平版が「四」に作るのと相反する例である。從って本書は清家本とはいえ、正平版を含む家本の忠實なテキストを傳えたものではなく、自由な校訂を經た異質の清家本とするべきである。

卷四の末に「正長二年（1429）二月十四日讀了（花押）」

卷五の末に「正長元年十一月二十八日以清原家秘本書寫了／即朱點墨點畢　少納言藤原朝臣（花押）」

と、本文とは別筆の奥書があり、書寫奥書ではなく、別本から寫し取った奥書である。

本文への書き入れは、墨の返り點・送りがな・縱點・附訓が本文と同筆で、後に、朱筆の句點・ヲコト點（少々）・附訓等が別筆で加えられている。「澤殿／藏書」印記を捺し、清原宣嘉の舊藏であることを示す。宣嘉は舟橋庶流家の澤宣嘉、天保 6～明治 6（1835～1873）。静嘉堂文庫に澤宣嘉書き入れの古活字版の『孟子』（Ａ種ｃ）を存し、幕末に經書の講讀を繼續した清原家の學者であった。本書の正長の元奥書は、即ち宣嘉の書き入れの可能性がある。從って、本書は、第１册首の墨印が示す舊藏者（不明）の古寫本を澤氏が入手して讀習したもので、元來清家に傳わったものでは無い可能性が高い。本文や訓點の純粹な清家本との違いは、そうした原因によるものかもしれない。ここでは、舊藏者をとって、暫く清家本の分類にしておく。安田文庫の藏印を捺す。

四、室町時代寫本、青蓮王府本　慶應義塾大學附屬研究

所斯道文庫現藏　5 册

本書は、『論語善本書影』(大阪府立圖書館　昭和六年)の第四十一に載せたもので、財團法人大橋圖書館が主催した『論語展觀目錄』の四十六番に著錄されている。所謂、「青蓮院本古鈔論語集解」である。第 1 册の扉副紙、並びに第 2 册目以降の各册首（公冶長第五・子罕第九・子路第十三・陽貨第十七）に「青蓮／王府」の四方大印を捺すので、かく稱されている。室町時代の儒学の趨勢は、清原博士家を中心とした公卿學士の大いなる牽引力によって、武士等の新たに興隆した新勢力をも教化して、公家秘本の文化を開放に向かわしめたところに大きな特徴を見ることができるのであるが、依然、上古以來の學問の舊勢力たる寺院学僧の蒐書講讀は、學術界を支える動かしがたい實力を有していたことは申すまでもなく、加えて、彼らが、これら公卿學士勢力と明に暗に接點を持していたことが、中世の儒學に空前の活況を實現せしめた要因の一つであろうと想像されるのであって、『論語』講讀の博士家傳本の現存と、かかる寺院所傳の古鈔本の現存狀況が、そうした當年の儒學界の動向を如實に物語る證左である點、本書の如き由來の確かな優れた完本の存在の價値は、一言を以て之を蔽うことはできぬ奥深いものがある。毎册の末に「靖齋／圖書」の印があるのは、國學者谷森善臣（1817～1911）の舊藏を示す。谷森は伴信友（1773～1846）の門下で、明治に御用掛として皇室系譜の調査等に從事したことから、或はこうした傳本を所持したものであろうか。縹色の古表紙は原裝。縱 26.2 横 20 糎。第 1・3 册のみに元題箋を存し、「論語　自一／二」「論語　自五／至六」と室町期の墨書がある。各册に二卷四篇ずつを配す。何晏の「論語序」を 2 丁半、首に附す。乃ち墨付き 3 枚目裏葉から、「論語學而第一」と題し、「子曰學而時習之不亦悦乎」と本文が始まり、注釋は小字雙行にて記す。墨付きは第 1 册から、それぞれ、32・38・41・45・30 枚である。無邊無界の 6 行 13 字。字面の高さ約 18.5 幅約 15 糎。柱は何も記さない。料紙はやや厚手の斐楮交漉紙を用いる。墨痕鮮やかで、全册、一気呵成の一筆である。

卷題は第一篇學而と第十五篇衛靈公は同様の體裁で、書名のみ。第二篇以降「論語爲政第二　何晏集解　凡二十四章」と第二十までを題し、第七は「論語述而第七　何晏集解　舊凡三十九章／今三十章」第九は「論語子罕第九　何晏集解　旧凡三十一章／皇三十章」第十九は「論語子張第十九　何晏集解　凡二十四章／凡二十五章」と題す。また、尾題は「論語卷第三　經一千七百十一字／註二千八百二十字」の如く、毎卷末に字數を添えている。字句の異同や、字面の様子からして、正平版『論語』の系統を引くものであることは疑いを入れない。ただ、「學而」最終章、「不患人之不己知」に本書は「王肅曰但患己無能知之也」の注を附し、この一句は正平版以後の集解本には無いものが多く、『論語義疏』本はこれを存する。こうした例から、本書は、正平版の系統に依りながら、義疏本の影響を受けている一本であると判斷できる。本書の本文並びに注解の字體は、『古文尚書』に見るが如き異體を多く存し、それが、依據せるテキストによるものなのか、はたまた書寫習慣によるものなのかを詳らかにしないが、淵源淺からぬものを感じ取ることができる。本文への書き入れは、朱墨兩様あり、しかし、本文書寫時と同時の同筆によるものと思われる。朱は、句點・朱引きにして、墨は薄墨を用いて返り點・送りがな・附訓・縱點・聲點である。舊藏である京都粟田の青蓮院は、天臺宗の門跡寺院。粟田御所とも呼ばれた。鳥羽法皇の第七皇子が行玄大僧正門下となり、比叡山から京都に坊を移し、御所寺院を建立したことから、粟田宮となった。その後、第三世慈円の時に最も榮え、また第十七世尊圓法親王の書法は御家流として代々受け繼がれた。最近では、『青蓮院門跡吉水藏聖教目錄』(平成 11 年＝1999 刊・汲古書院）が編纂されている。「安田文庫」の藏印がある。

五、應永 33 年（1426）寫本　慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫現藏　1 册

本書は從來の書目等に未載のもので、書寫年代も古く、書寫字様も古き様式を止めている。本書が安田文庫に入った經緯について、末尾に薄様の副紙一葉を附して、川瀬一馬博士が次のように墨書している。

「昭和十年十一月中旬神田某書肆（洋本をひさぐもの）より應永の奥書有る論語あれば持參すべしとの狀來る。直ちに赴き見るに烏丸家の反古より索め出でたるとて本書を示さる。零本なる事は惜しむべしと雖も、應永の筆なる事疑う可からざる。よりてこころみに其反古を出さしめて檢するに、烏丸にあらで、實は廣橋家なり（廣橋家の舊藏書は一括して東洋文庫にあり）。本書もと二册にして第一册の卷首を缺ける上、表帋をも失し、第二册は表帋存せしなれど、凡て蟲損甚しければとて、時に、張込帳二帖に改裝せられ極めて不都合なる體をなししかば、まづ册子に復元す可きをすすめぬ。告るところの價また我が意を得ざりしも、ややありて、我が言に從へるを以て、三日の後を約して去る。後日、文庫主人の許を得て、乃ち之を求む。命ずるか如く改裝成りて、本日文庫に納むるに當り、本書所獲の次第を附記すと云爾。昭和十年乙亥十一月二十二日　安田文庫に於いて　川瀬一馬識」

廣橋家は藤原氏日野家支流の名家。蟲損甚だしく反古紙に混じっていたため流れたものである。殘存の茶褐色の元表紙（縦 25.3 横 18 糎）を用いて 1 册に改裝。総裏打ちを施す。「四之内」と古い墨書があり、或はもと 4 册であったか。また、「承益」とふるい所持署名を墨書する。首の何晏の序を欠き、卷第一學而の第二章「有子曰、其爲人也：：」の「曰」からを存し、それ以前が缺している。また、子罕第九から堯曰第二十、乃ち卷五～十も缺する。單邊有界（縦 20.8 横 15.2 糎、毎行の幅 2.5 糎）6 行の墨界に毎行 13 字で小字雙行に書寫し、全卷一筆である。柱には「一卷　四丁」等と、卷數・丁數を墨書する。料紙はやや厚手の楮紙を用い、墨色濃厚、字勢有勁、まさに南北朝書寫本の遺風を感じ取ることができる。

首題は「論語爲政第二　　何晏集解　凡二十四章」という體裁。但し、述而第七は「論語述而第七　　何晏集解　舊三十九章／今三十八章」と題す。尾題は「論語卷第一　經一千四百七十字／註一千五百一十三字」等と字數を記す。

卷第四尾題の後に次の、本文と同筆の書寫奥書を存する。

「旹應永三十三季龍集丙午正月下澣／青華道人書于／防州白松大林蘭若客軒之下」

この奥書の左下に「主慶倍」「承益」というそれぞれ別筆で、本文とも別筆の署名がある。

本書の由來を想像する時、中世周防國の大内氏による文化事業を思わずにはいられない。平安時代末より周防の國を領した大内氏は、義弘（1356～1399）の時、朝鮮を通じた貿易で榮え、應永の亂で敗死するも、弟の盛見（1377～1431）が『藏乘法數』を應永 17 年（1410）に刊行するなど、所謂大内版の名で知られる出版文化事業を担っていた。盛見はまた、香山國清寺を建立して兄義弘の菩提を弔った。國清寺は「香山常住」の墨印を捺す宋元版を多く所有し、今、各地に散在してしまったが、大内氏が日明・日朝貿易によって如何に多くの貴重圖書を購入していたかの一端を伺い知ることができる。こうした富裕な文化を背景に持つ故に、京都から、學問に下向する學者も多かったと言われる。『五山版の研究』（川瀬一馬）の「室町初期に於ける開板」の章にこの事情は詳しい。『論語』に關して言えば、正平 19 年（1364）頃に堺で初めて刊刻された（正平版論語）事實とさほど時を經ていない書寫に係る本書は、この頃の『論語』需要の傳播を如實に語る遺品であると言えよう。識語中、白松は瀬戸内海に面した阿知須町・宇部市の近邊を指し、大林蘭若という禪僧の元へ寄居した青華道人がここで書寫したのである。「安田文庫」の藏印がある。

六、室町時代寫本（高木文庫舊藏）　慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫現藏　2 册

本書も前掲の一書と同じ、高木文庫から安田文庫へ移ったものである。『論語善本書影』（大阪府立圖書館昭和 6 年＝1931）の第三十八に載せたもので、財團法人大橋圖書館が主催した『論語展觀目錄』の五十九番に著錄されている。やはり、このときはまだ高木氏の藏であった。その『論語善本書影』の解題には、足利中期の鈔であろう、と述べている。そもそも足利中期、つまり室町時代の中期か末期かと言う書寫年代の推定は、比較上の問題で、本奥書（もとおくがき）が確かなもの以外は確としてその書寫年代を決めることはできない。室町時代の『論語』古寫本は、慶應義塾圖書館所蔵の應永 6 年（1399）寫本、前掲安田文庫舊藏廣橋家本應永 33 年（1426）寫本、東洋文庫所藏の寛正 1 年（1460）寫本が書寫年代の明かな室町前期の古寫本で、しかし、南北朝の、例えば建武 4 年（1337）の清原頼元寫本（大東急記念文庫藏）等と比較すると風格に劣勢を感じないわけにはいかないのであって、かなり大局的な見方をすれば、15 世紀以降の寫本は、室町時代寫本として一括するのが無難ではある。永正年間以降、つまり、16 世紀以降は清家本の全盛を迎え、轉寫に轉寫を次ぎ、却って奥書年代の明かなものも增えることになるものの、さて、永正大永年間（16 世紀初）の寫本と永祿ころ（16 世紀中後）の寫本との風格の違いを説明しろと言われても、その明確な答えは探し得ない。室町時代の前中後は、1400 年から 1600 年の 200 年を三等分するわけであるが、『論語』の書寫年代に限って言えば、その分類はあまり意味を持たない。本書について言えば、中期なら永正頃、末期なら永祿元龜頃を指そうが、その時代の差よりも、むしろテキストの由來にこそ分類の焦點が當てられるべきなのである。乃ち、本書は毎篇の題に續き一篇の趣旨とも言うべき総括文が附されている。これは、日本に傳わる『論語義疏』に附されているものと同一であり、かつ一般の集解本には附されていない一文である。この狀況は、前記、青蓮王府本の項においても言及したところであるが、室町時代の『論語』受容の一特徵として、集解本を主としながらも、義疏本の影響を多大に蒙っていることが擧げられ、最も顯著な本書のような一連の寫本を「義疏竄入本」として區別することができるのである。『義疏』の現存す寫本は多くはないが、室町中期以降の寫本が殆どで、義疏・集解

兩本の平行受容を考えれば、本書の書寫も中期以降であることは明白で、細かく書寫年代を區切ることに拘る必要は無い。茶色の表紙（縱 24･5 横 17･8 糎）は原裝で、覆表紙・包背裝に仕立てられる。首に何晏の序「論語序」二丁あり。卷頭は、

論語學而第一　　何晏集解　凡十／六章

論語是此書捻名學而爲第一篇別目中間講讀／

多分爲科段侃昔受師業自学而至堯曰凡二十／（論語是以下小字雙行）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

子曰學而時習之不亦悦乎　馬融曰子者男子之通／

称謂孔子也王肅曰時／（馬融以下小字双行）

と題し、本文の前に本章の解説を加える。しかして二十篇全てにこれがある。但し、述而第七・顔淵第十二・は「何晏集解　凡幾章」の文字が無い。泰伯第八・鄕黨第十・先進第十一・微子第十八・子張第十九・堯曰第二十は「凡幾章」の文字が無い。子罕第九は「論語子罕第九何晏集解　舊凡三十一章／皇三十章」。また、尾題は「論語卷第一」として經注字數を加えるが、「卷幾終」としたり、「卷幾之終」としたり、一定せず、卷三・四・八・九・二十（十の誤り）は經注字數が無い。墨付きは第 1 册（卷 1 至 5）47 枚、第 2 册は 49 枚。料紙は薄手の斐楮交漉紙で、本文は二種類の手跡がある。字樣は略字多く、室町時代後期の典型である。

こうした寫本は、底本を忠實に寫す傳寫本とは違って、學僧が自己の講讀に備え、氣取らずに寫し取ったもので、臺北の故宮博物院に所藏される、養安院舊藏の古寫『孟子』と甚だ似通った趣きを呈している。氣輕に荒く筆を流しているように見えるが、詳細に見つめてみると異體字を含んだ端正な字體と柔らかい筆の動きが感じられ、書寫年代を古く設定したい感覺がよく理解できる。

墨書による單邊（縱 20.5 横 13.5 糎）有界（界幅 1.2 糎）の紙面に 8 行 20 字、小字雙行で記す。書き入れは、朱引き・朱點、墨の返り點・送りがな・縱點・附訓を加え、本文同筆のものと、後に加えたものがあるが、おしなべて本文書寫者の訓點本と見られる。「安田文庫」印記を捺す。

七、室町時代末期寫本、三十郎盛政本　慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫現藏　2 册

本書は財團法人大橋圖書館が主催した「論語展觀目錄」の四十七番に著錄され、『論語善本書影』（大阪府立圖書館　昭和六年〈1931〉）の第三十九に載せたもので、清原博士家の訓點の證本として、安田文庫中、最も價値ある傳本である。夙に、『經籍訪古志』に紹介された求古樓狩谷棭齋の舊藏になるものである。『經籍訪古志』が編纂された幕末の当時、『論語』古鈔本は 14 本が著錄され、その殆どが求古樓の所藏であった。まさに安田文庫は求古樓の再來であった。本文共紙の元表紙に縹色の覆い表紙を加える。包背裝の形をとるが、背に糊付けはしていない。室町時代末期（15～16 世紀頃）に流行した裝訂である。外題は、元表紙に「論語　一之五」「論語　六之十」と墨書する。本文と同筆かほぼ同時代の筆であろう。覆い表紙には題箋（室町期）があり、「論語　六之十　何晏集解」と墨書し、第一册は題箋が剝落し朱筆の異筆で、「論語　一之五」と記す。首に「論語序／叙曰漢中壘校尉劉向：：」と、魏何晏の序が 3 丁ある。本文は「論語學而第一（低三格）何晏集解」と題し、次行から「子曰學而時習之不亦説乎」と始まり、何晏の注解は小字雙行で書寫される。ただし、卷二以降は、「論語爲政第二　凡二十四章　何晏集解」と章數を記す。第七は、「論語述而第七　舊三十九章／今三十八章　何晏集解」、十一は、「論語先進第十一　鄭二十三章／皇二十四章　何晏集解」と題す。薄墨による墨界を施し、單邊有界毎半葉 5 行 14 字、界の高さは 20.4 糎、半面の界幅は 16.4 糎、毎行の幅は 3.3 糎である。墨付きが第 1 册 92 枚（序を除く）第 2 册 107 枚である。料紙は薄手の斐楮交漉紙。尾題は「論語卷第一　經一千四百七十字／注一千五百一十五字」と各卷末にあり、卷第十まである。卷十の副紙に本文と同筆で、書寫奥書を記す。

「右本清家秘點也則雪庵道白眞筆寫之／三十郎盛政（花押）／墨印」

三十郎盛政が清原家の秘本である雪庵道白の眞筆本を寫し取ったものであると。雪庵道白は清原枝賢の法名。室町時代の清原家は、宣賢を中興の祖とし、枝賢、國賢、梵舜、秀賢と代々『論語』の訓讀が繼承された。以下それに關わる『論語』。

清原宣賢（文明 7〈1475〉～天文 19〈1550〉）の點本

1，京都大學に令寫本に自筆の訓點を付す單經本（存卷六～十、1-66-ロ- 8）

2，大阪府立圖書館に釋梅仙寫　永正 9 年〈1512〉宣賢奥書本

清原枝賢（永正 17〈1520〉～天正 18〈1590〉・宣賢の孫）に關する寫本

3，京都大學に天文 5 年〈1536〉令寫本（1-66-ロ- 5・1-66-ロ- 8 と同筆）

4，京都大學に天文 19 年〈1550〉奥書單經本

（清原良枝書寫本、良枝は鎌倉時代建長 5 年

〈1253〉～元弘 1 年〈1331〉1-66-ロ- 6）
清原國賢（天文 13〈1544〉～慶長 19〈1614〉・枝賢の男）に關する寫本
5，前田育德會尊經閣文庫に慶長 6 年〈1601〉國賢元奥書を遺す慶長古活字版『論語』
釋梵舜（天文 22〈1553〉～寛永 9〈1632〉・宣賢の孫）に關する寫本
6，京都大學に元龜 2 年〈1571〉書寫本（谷村 1-66-ロ- 1)、宣賢點を寫す
吉田兼右（永正 13〈1516〉～天正〈1573〉・梵舜の父、宣賢の男）に關する寫本
7，天理圖書館に宣賢點の書寫本あり
清原秀賢（天正 3〈1575〉～慶長 19〈1614〉・國賢の男）に關するもの
8，靜嘉堂文庫に慶長 8 年〈1603〉瀧川忠征が秀賢點を寫し取った慶長古活字版
(8183-2-101-20)

以上のような現存本による清家の繼承を確認できるわけだが、本書はその枝賢本の流れを汲む貴重な證本である。

三十郎盛政は、阿部隆一博士の考證によれば、國賢の門人であるという。書寫は一筆で、本文、訓點ともに同一人が同一時に一氣に寫し取ったものである。訓點の内容は朱のヲコト點、墨の返り點・送りがな・縱點・附訓・聲點・濁音符・音注・校合（正・才・イ・本・摺・古本・音釋）である。京都大學の天文五年枝賢令寫本（1-66-ロ- 5）と字樣もよく似、附訓や校合もほぼ同じ内容で、同一の祖本を持つものと判斷される。本書のほうが校合の項目が多い。印記は、「月の屋」（横山由清）「安田文庫」が捺される。

第三章　安田文庫收集慶長刊本『論語』

慶長時代（17 世紀初）の 20 年ほどの間に木活字を用いて優れたテキストが編纂出版されたが、とりわけ漢籍では經部書に特異な成果を見た。由緒ある博士家の寫本に宋元版を加えて校訂したもので、その本文價値は、古活字版と呼ばれる版刻印刷史上の價値を大きく上回るものがある。『論語』は、無刊記本に 2 種類の版、有刊記本に 1 種類の版がおこされた。そしてその活字本を覆刻した整版本（木版本）に 1 種類の版があった。そこで、版刻史上注目するべきは、一般に江戸時代の初期の出版事情として知られるのは、古活字版が上梓された後に、それを底本として、更なる流布を目指して覆刻し、整版（木版）印刷が行われる慣例が見られることであるが、『論語』には、それとは逆に、慶長の初め頃、「要法寺版」と呼ばれる整版（木版）が行われ、その整版（木版）をもとに無刊記の活字本が組まれたと思しき形跡が認められるのであって、この事情を物語る要法寺版の存在は極めて高い價値を有すると言わなければならない。

安田文庫が收集した慶長刊本『論語』は、活字本に慶長 14 年（1609）洛汭宗與開版の刊記を有する一本（德川家舊藏）がある。この版は他に東京大學総合圖書館南葵文庫・慶應義塾大學附屬研究所斯道文庫・お茶の水圖書館成簣堂文庫に所藏されるのみである。また、要法寺版 2 本（1 本は所在不明）を所藏し、本版も慶應義塾圖書館・國立國会圖書館・東洋文庫等に所藏されるもので極めて少ない。安田文庫舊藏慶長刊本『論語』はいずれも東京大學東洋文化研究所に現藏する。

川瀨一馬博士の「安田文庫古版書目」（『書誌學』3 卷 1 號・昭和 9 年〈1934〉）によればもう 1 本の活字版を所藏していたようであるが、現所在は不明である。

第四章　安田文庫收集正平版『論語』

正平 19 年（1364）に日本で最初に刊刻された『論語』は正平版『論語』の名で知られるが、無論、その本文上の價値は、古い博士家の古寫本に依據していることから、宋刊本と並び稱されるほどのものがあり、室町時代を通じて寫本テキストに影響を與え續けたという點でもその存在意義は絶大である。また、それゆえに數回に亘って版を重ね、公家・緇流（学僧）の需要に答えたのである。正平 19 年の初刻本は既に得難く、大阪府立圖書館所藏本と零本が 2 點現存するのみである。室町時代前期（15 世紀前半）に 1 度覆刻され、中期（15 世紀中）に再び覆刻され、この 2 度目の覆刻本が息長く印刷され、現在もその版木が遺されている。また、第二章の 5 に述べた山口周防の大内氏領内で、明應 8 年（1499）に覆刻が行われている。こうした『論語』の受容史上、注目するべき轉換點を築いてきた正平版は、當時第一級讀者の讀書軌跡を遺す、所謂書入れ批入に於ける價値をも傳えていることは強調されなければならない。

安田文庫は、この正平版を 4 種も所藏し、それは 1 度目の覆刻本 1 本と、2 度目の覆刻本 3 本（うち 1 本は零本で、1 度目の覆刻本に補配されているものである）であった。全體の現存狀況を見ても、各版種に數本

しか遺らないなかで、これだけの収集を行ったのは特筆するべきことであろう。しかも、2度目の覆刻本の1本は、京都の著名な禅僧の讀書を經て、學問ある武士とされた直江兼續の舊藏本であり、室町時代の『論語』受容を如實に示す貴重本であった。これらの安田文庫舊藏正平版『論語』は全て東京大學東洋文化研究所に所藏されている。

『日本訪書志』書き込みに見る内藤湖南書誌學の一端

玄　幸子

東洋學の泰斗である内藤湖南についてはすでに中國の學界においても多くの關連論著も出ており贅言は避ける。ここでは古書蒐集家としての一面に焦點を當ててみたい。湖南の古書蒐集についていえば、もっとも有名なものは現在日本の杏雨書屋所藏となっている『説文解字』木部殘卷であろう。大正15年3月21日付け「サンデー毎日」(第5卷第13號) 掲載の「掘り出した二大珍書」という談話記錄に17年越しの渇望がかなえられた事情を湖南自身の口述として紹介しているが、その眼識の高さ及び執念ともいえる情熱をよく傳えているエピソードである。

他方『日本訪書志』は楊惺吾守敬が光緒6年（1880年）公使館員として來日した4年の滞在期間中に日本に傳存する漢籍古書を蒐集、その成果として著し公刊したものである。湖南が楊守敬『日本訪書志』を入手した時期は、富岡謙三あての葉書の記述から知ることができる。

> 富岡謙三宛葉書(明治三十六年(1903)3月5日消印)
> 數日内東上途次貴地へも立より可申候　前月末黒板兄過訪　大に心經殘石をふりまはし申候　これは多分天寶元年のものと見當つき申候　楊守敬の日本訪書志、留眞譜二書着　甚だ快　餘期面悉
>
> 『内藤湖南全集』第14册406頁より抜粋

この時湖南38歳、年譜によると前年10月大阪朝日新聞社により派遣されていた中国から1月に歸國、3月より大阪にて開催されていた第5回内國勸業博覧會に來日した中國人諸氏との交流を得た時期のようである。中國派遣においては奉天にて滿蒙文藏經を發見、北京では沈曾植に唐蕃會盟碑拓本を贈られ、劉鐵雲らに會い、杭州では文瀾閣の四庫全書を觀るなど已に大きな成果を得て歸國している。その後、2月に黒板勝美を過訪し心經殘石に關して共に檢討し天寶元年（742年）のものとあたりをつけたように讀める。諸事報告に合わせて最後に『日本訪書志』『留眞譜』の二書が届いたことを記している。

その後の湖南の『日本訪書志』參照狀況については湖南の執筆の中から引用することで確認できる。次に引用してみよう。

まずは、明治三十六年八月十八、二十日「大阪朝日新聞」掲載「訪古の一日半」に

> 篆隷萬象名義は弘法大師の著にして、鳥羽帝の永久二年六月の寫本六册完備せり。此書の價値に就て清人楊守敬が日本訪書志に述ぶる所最も要領を得たれば左に節鈔すべし。　『内藤湖南全集』「目睹書譚」第12册95頁より抜粋

とあるように、入手後高い評價とともに紹介している。

明治四十五年六月十五日の弘法大師降誕會講演での言及では、

> 此の文鏡秘府論と云ふものは珍本であって、唐の時の詩文の法則を書いたものであると云ふことを注意したのは、勿論日本でも注意して居る人が無いではありませぬけれども、是は支那人が矢張り注意いたして居る。支那人で明治十三四年の頃からして明治十七八年頃まで東京の支那の公使館に來て居った男で、楊守敬と云ふ人があります。此の人は今でも支那に居ります。先頃支那に騒亂のあった時、武昌に居つたのが、今は避難して上海に居ると云ふことでありますが、今は七十幾歳かの老人であります。其の人が注意を致して、自分で著はした日本訪書志と云ふものに書いてあります。　『内藤湖南全集』「弘法大師の文藝」第9册67頁より抜粋

この後、大正十年十二月著の「富岡氏藏唐鈔王勃集殘卷跋」などにも言及される。

> 明治初有官板石本二種清楊星吾得之知其爲王勃集殘卷收其佚文十三首於日本訪書志中但星吾所見石本殘缺實非正倉院詩序足本既余又覩大阪上野氏所藏古鈔文集一卷及平安神田氏所藏古鈔祭漢高祖文一首知其係勃集殘帙明治庚戌上野有竹君以其本同

一帙合兩本付之玻璨板余爲跋之具論其爲勃集最舊之帙會余游燕山擧以贈伯斧及彼地諸碩學已歸又得續藏本道誠注成道記再寄伯斧伯斧驚喜　　『内藤湖南全集』「寶左盦文」第 14 册 29 頁より抜粹

さらに、昭和三年五月二十日の「寛政時代の藏書家市橋下總守」と題する講演では、

それは本當の詳しい名を申すと長くなりますが、畫一元龜といふ名で多くの人が知つて居る本であります。これは宋版の本の中では非常な珍本であります。これを十八册獻上したのでありますが、これは有名な金澤文庫の舊藏でありまして、此の本が藏書家に注意をされたといふことは、先づこの市橋下總守から始まつて居ります。其後有名な支那人の楊守敬が日本に來た時にこれを三卷程得たことを、日本訪書志といふもゝ中に書いて居ります。　　『内藤湖南全集』「先哲の學問」第 9 册 425 頁より抜粹

と述べるなど、かなり參照していることがわかる。特に畫一元龜の部分については後述の通り『日本訪書志』の項目の頭に朱で注してあり、殘本の系列と所在の詳細を湖南の書入れから知ることができる。

『日本訪書志』に対する評價は上記の通りであり參照していることが知れるが、著者楊守敬に對してはどうであろうか。講演會での言及を引用してみよう。

明治の初年に楊守敬と云ふ男が支那から來てゐた。此の男は近年古本を見る支那一流の人と云はれてゐますが、眞個云ふとこれは日本で修業をしたのです。此の男が支那の公使館へ來たのは明治十二三年頃で、始めは碌々何も解らなかった。それが日本に來てから森立之と云ふ―これは近藤重藏を直接知つてゐるか何うか知らないが、古本の鑑定を傳へられてゐた―この森について教はったので、それが國に歸る時、いろいろ本を賣ったりした人があったので澤山の本を持つて行きましたが、現在ではまた其の時の本がだんだん日本に返つて來たりしてゐますが、兎に角これが支那第一の古本の鑑定家です。　　『内藤湖南全集』「目睹書譚」宋元版の話　第 12 册 249 頁（昭和五年十二月十四日名古屋公衆圖書館に於ける愛知縣並に愛知縣圖書館協會合同主催講演會にて）より抜粹

以上の様に、楊守敬に對しては『經籍訪古志』の著者である森立之の教授を受けたと指摘しつつ支那第一の古本の鑑定家であると認めている。

明治三十六年に入手してより常時參照していたであろうことは上述よりわかり、さらに以下に見るように複數セット所有していたことからも、内藤湖南にとって參照に値する有用の所であったことは明らかであろう。次に、實際の書入れ狀況の檢討に入ろう。

さて、關西大學図書館内藤文庫には 4 セットの『日本訪書志』が所藏されている

1，L21**4*1485-1～8[1]

日本訪書志，16 卷 / (清)楊守敬撰，宜都 :楊氏隣蘇園 ，光緒 27 序[1901]　湖南書入:「共八本 癸卯二月仲三彪卿」

2，L21**4*1486-1～8

日本訪書志, 17 卷 / (清)楊守敬撰，宜都 ： 楊氏隣蘇園 ，光緒 27 序[1901]

3，L21**4*1489-1～8

日本訪書志, 16 卷 首目錄 1 卷 / (清)楊守敬撰　宜都 ： 楊氏隣蘇園 ，光緒 27 序[1901]　注記　付: 原稿用紙書き込み 4 枚

4，L21**4*1490-1

日本訪書志, 17 卷 / (清)楊守敬撰，宜都 ： 楊氏隣蘇園 ，光緒 27 序[1901]

このうち湖南の書き込みが確認できたのは、上記 1，2，3 である。書き込みの狀況は書名上に朱で〇を付しただけのもの、朱で句點を書き入れたもの、眉批のあるもの、部分に朱で傍點を入れたもの等々、かなり異なっている。

1，2，3 を通して書き込みのある書籍の題名を列擧すると次のとおりである。

周易正義十四卷本　舊鈔本；伊川易解六卷繫辭精義二卷　刻入古逸叢書；尚書注疏二十卷　宋槧本；**春秋左傳集解三十卷　古鈔卷子本**；大廣益會玉篇三十卷　元刊本；韻府羣玉二十篇　元槧本；**新撰字鏡十二卷　影古鈔本**；弘決外典鈔四卷　寶永丁亥刻本；**淨土三部經音義　舊鈔本**；**古鈔文選一卷卷子本**；唐元宗開元注孝經一卷　翻北宋本；爾雅注三卷　重翻北宋本；龍鑑手鑑八卷　朝鮮古刻本；韻府羣玉二十篇　元槧本；一切經音義一百卷　日本藏高麗本；**篆隸萬象名義三十卷　舊鈔本**；弘決外典鈔四卷　寶永丁亥刻本；**淨土三部經音義　舊鈔本**；臣軌二卷　八年刊本；**唐六典三十卷　古鈔本**；唐律疏義三十卷　日本刻本；朝鮮國大典通編六卷　朝鮮刊本；東國史略六卷　朝鮮古刻本成都楊氏重刻；**華夷譯語十三册　鈔本**；文中子中説十卷　日本重刻北宋小字本；圖繪寶鑑五卷　日本舊

1　關西大學圖書館の請求記號である。以下同じ。

刻本；書史會要九卷補遺一卷　明洪武九年刻本；酉陽雜俎二十卷續集十卷　明刊本；遊仙窟一卷；初學記三十卷　明宗文堂刊本；書敘指南二十卷　明萬歷刊本；**類篇羣書畫一元龜丁部殘本　鈔本**；錦繡萬花谷前集四十卷後集四十卷續集四十卷別集三十卷宋槧明印本；事文類聚翰墨全書殘本　元槧巾箱本；新編羣書類要事林廣記九十四卷　日本元祿十二年刊本；**秘府略殘本二卷　鈔本**；文章軌範七卷　朝鮮國刊本；歐陽文忠公文集三十六卷；和靖先生詩集二卷　日本貞亨丙寅刻本；朝鮮賦一卷　朝鮮刊本；貞元新訂釋教目錄三十卷　日本享保刊本；釋氏要覽三卷　日本刊本；人天寶鑑　并前後序文八十四葉／日本仿宋刻無年月；禪苑蒙求三卷　寛文九年刊本；困學紀聞二十卷　元刊本；太平廣記五百卷　明刊本；**黄帝明堂一卷　卷子本**；醫心方三十卷　摸刊古卷子本；御藥院方十一卷　朝鮮刊本；**幼學指南鈔三十卷殘**本；**古鈔王子安文一卷　卷子本**

以上 51 書

本稿では古寫本を主として取り上げる。上記の太字で示した書物が對象となる。

それぞれの書入れ狀況は次のとおりである。

1，周易正義十四卷本　舊鈔本
　眉批：余所藏古鈔本亦如此
　　一部朱右傍點あり
2，春秋左傳集解三十卷　古鈔卷子本
　文中「爲足利士族」に右朱傍点
3，新撰字鏡十二卷　影古鈔本
　乱丁にて頁數改め
4，淨土三部經音義　舊鈔本
　乱丁にて頁數改め
5，淨土三部經音義　舊鈔本
　乱丁にて頁數改め
6，古鈔文選一卷　卷子本
　眉批：此本昭和戊午／歸上野氏有／竹齋[2]
7，篆隷萬象名義三十卷　舊鈔本
　書名上に朱○
8，淨土三部經音義　舊鈔本
　書名上に朱○、朱で句點、部分朱右傍點
9，唐六典三十卷　古鈔本
　「日本享保甲辰／其攝政大臣家熙」に右朱傍點
　「日本天保七年刻本書籤亦稱官板」に朱右傍點
10，華夷譯語十三册　鈔本
　書名上に朱○
11，類篇羣書畫一元龜丁部殘本　鈔本
　眉批：此書殘本今／祕府有十八卷／久原文庫有／三十一册岩崎／文庫有六册／並未得卷數／皆宋刻也／此書見存兩種／一有金澤文庫／印者此本及／祕府本是也／一有不二菴印／者久原本岩／崎本是也
12，祕府略殘本二卷　鈔本
　書名上に朱○
13，黄帝明堂一卷　卷子本
　眉批：丙寅三月余／獲此本
14，幼學指南鈔三十卷　殘本
　眉批：卷二天部／卷五水部／卷十九儀飭／服飾部／卷廿三寶貨上／卷廿五穀粟／菜蔬部／以上藏于久原文／庫／卷七人部／卷廿二巧藝／方術、火部下／右二卷藏于／並河氏／未知卷數／産業部／章服部冠至／印綬笏／藏于近衛公／爵此零卷／丙寅十一月／廿九日擇以唐類函／及太平御覽／校記
　本文最終行に朱で「所引不止初學記鈔自祕府略諸書也」とある。
15，古鈔王子安文一卷　卷子本
　目録一部項目に朱で○や併合記号、補足
　「失題」上部眉批：於他鄕勝友難遭／盡歡於此席
　最終行「……憂別思」に續けて朱で「晩晩年光時不再來須／探一字」と書き入れる。次葉に「慶雲四年七月廿六日　用紙貳拾玖張」

では、次に○や諸記号、傍點を除き眉批を取り上げて檢討してみよう。

1，周易正義十四卷本　舊鈔本について

まず、「余所藏古鈔本亦如此」という眉批が書き込まれた『周易正義十四卷本』は、『恭仁山莊善本書影』（大阪府立圖書館編 昭和 10 年）に「八○　周易正義　唐孔穎達撰　十四卷　七册　古鈔本」として圖版「第一卷第一論首　原寸」の写真が掲載されており、1935 年時點ではその存在が確認されていたことがわかる。半葉の寫真からわかる情報は「半頁 12 行毎行 20 字罫線あり」である。ところが以後の目録には一切現れない。『日本訪書志』では「單疏、古鈔本。無年月。狩谷望之求古樓舊藏相傳。弘治永祿間鈔本。」とある。狩谷棭齋舊藏の室町末に書寫された鈔本ということであるが、全國漢籍データベースで檢索してその所藏が確認でき

2　上野理一（1848～1919）大阪朝日新聞（現朝日新聞）社主「有竹」は號。

る室町末書寫の 14 卷鈔本には、室町末（王月軒）とされる國立公文書館藏本および舊鈔本とのみある京都大學人文科學研究所藏の二本である。現在いずれもデジタル資料を公開している[3]。

國立公文書館藏本は、林羅山舊藏本にて森立之『經籍訪古志』によれば「元龜天正間鈔本　昌平學藏」とあり「大明王氏月軒謹書。天正十年壬午毛冬吉月吉日、在武州川越郡抄也。」とあって王月軒については「按王氏月軒蓋歸化明人。……豈月軒以傭書爲生火與。」とある[4]。また、京都大學人文科學研究所藏本に關しては、『中國典籍日本古寫本の研究 Newsletter No.VI』に「讀京都大學人文科學研究所藏鈔本周易正義跋」と題する永田知之氏（京都大學人文科學研究所准教授）による詳細な考證がある。これによれば、富岡謙藏舊藏を書肆の佐々木竹苞樓を通じて昭和 13 年に狩野直喜が落札し京都大學人文科學研究所に入れたことがわかる。

また、全國漢籍データベースでデータが漏れてしまっているものの中で、周易正義單疏本全 14 卷完本に京都大學圖書館清家文庫所藏本および廣島大學附屬圖書館所藏本の 2 本がある。廣島大學所藏本については野間 1995[5] によりその詳細を確認しうる。また、京都大學藏本は京都大學貴重資料デジタルアーカイブで公開されている[6]。

さて、上記の諸古鈔本には湖南所藏のものと一致するものが見當たらない。よって益々その重要性が推し量られるのであるが、遺憾ながら現在の所在を確認することができないまま 1935 年時点に湖南所藏であったことのみ確實な情報として記憶にとどめるばかりである。

6，古鈔文選一卷　卷子本について

この古鈔本は現在京都國立博物館に寄託されている上野家藏古鈔本である。本ニューズレター発刊のもととなっている科學研究費助成金・基盤研究（A）「中國典籍日本古寫本の研究」の活動の一環として我々は平成 27 年（2015 年）3 月に京都國立博物館で調査を行い、この古鈔本を實見することができた。その時の報告に合わせて前述の永田知之氏が「上野本『文選』殘卷に寄せて―『文選』讀書史斷想」（中國典籍日本古寫本の研究　Newsletter No.2 2015.7）で本古鈔本に關する論考をまとめてくださっているので大いに參考にされたい。

鎌倉時代書寫とされるこの古鈔本は 1943.06.09(昭和 18.06.09)に重要文化財の指定を受けている[7]。『日本訪書志』に「此卽日本森之訪古志所載溫故堂藏本也．後爲立之所得．余復從立之得之．」とあるように森立之『經籍訪古志』で溫故堂藏本とされていたものが森立之の入手するところとなり、その後楊守敬の手に渡ったものである。さらに楊守敬が手放したのち上野家の所藏となったという經緯である。

そこで、湖南の眉批「此本昭和戊午／歸上野氏有／竹齋」がその事情を傳える情報ということになるのだが、「昭和戊午」というのは何かの書き誤りであることは疑いを入れない。まず「昭和」でないことは確實なので、「戊午」年がいつなのかということになるが、６０年周期で可能性があるのは大正戊午（七年、1918 年）ということになろうか。『上野有竹齋蒐集中國書畫圖錄』[8]の神田喜一郎序文に、明治 44 年から大正 9 年 12 月逝去までのほぼ 10 年間が上野理一翁蒐集時期として最良であったというコメントが見える[9]ことからもまずは間違いなかろう。

11，類篇羣書畫一元龜丁部殘本　鈔本

湖南の眉批によれば、當時の殘本の狀況は、①祕府本十八卷、②久原文庫本三十一册、③岩崎文庫本六册であり完本はなく、すべて宋版であった。さらに金澤文庫印のある祕府本と不二菴印のある久原本、岩崎本の２種が認められるということであった。

3　それぞれの公開 URL は次のとおりである。
國立公文書館藏本：
https://www.digital.archives.go.jp/img/1073908
京都大學人文科學研究所藏：http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/ShiSanJingZhuShu/html/A014menu.html

4　土屋裕史「當館所藏林羅山舊藏書（漢籍）解題①」(『北の丸』第 47 号　国立公文書館報 / 国立公文書館 編(47) 2015.1 p.220-238）參照

5　野間文史「廣島大學藏舊鈔本「周易正義」について」(『日本中國學會報』(47), p106-119, 1995）および「廣島大學藏舊鈔本「周易正義」攷附校勘記」(『廣島大學文學部紀要』第 55 卷特輯號，1995)

6　https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00008380

7　指定番號（登錄番號）：01220
https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/201/8031

8　京都國立博物館　1966 年

9　上野有竹齋蒐集の中國古書畫の由來が内藤湖南に觸發されたものであることを述べた後次のように蒐集時期について記している：わが明治四十四年、中國にいはゆる辛亥革命が起って、彼地から陸續と立派な古美術品が流出してきた。それは大體大正十年あたりまでつづいたが、大正九年十二月に逝去された上野翁としては、その晩年の約十年間、いはば未曾有の幸運にめぐまれて、鋭意蒐集につとめられたといってよい。多くの名品があつまったのも、あるいは當然といひうるかもしれない。（序文二頁目）

現在の所藏狀況は、①祕府本十八卷は宮内聽書陵部四〇三函六〇號[10]として所藏され、③岩崎文庫本六册は東洋文庫に收藏[11]される。②久原文庫本三十一册は大東急記念文庫に收藏される。

これらの收藏の經緯について先述の湖南の講演記錄[12]からさらに引用しておこう。

> 近年になって上村觀光君が、何處かの寺から見付け出しまして、それを三十一册久原文庫に賣り、六册を工學博士和田維四郎君に賣りました。この和田君にはいった本は今東京の岩崎文庫（東洋文庫、静嘉堂の以外に在る）に全部あります。(p.425-6)

當時あまり知られていなかったものを上村觀光・和田維四郎の２名の功績により廣く知られるようになった經緯を詳細に紹介している。

さて、上記はすべて關連する宋刊本についての記述であるが、『日本訪書志』にある鈔本については、詳細がわからない。「首有金澤文庫印又有樂亭文庫印」とあるので、金澤文庫系列を書寫したものかとも思われるが、「樂亭文庫[13]印」もある點から、卽斷は避けたい。

鈔本としては現在本學内藤文庫に「類編秘府圖書畫一元龜　存７卷」（甲部卷之 7-13、タイトル別名：類編祕府圖書、印記: 「静盦」）[14]が所藏されている。長澤規矩也（號静盦）の印記がある。書寫者書寫年代不明の資料であり恐らく近代の書寫になるものかと思われるが、これについては稿を改めたい。

13，黄帝明堂一卷　卷子本

丙寅三月は大正 15 年３月である。湖南が入手した時期を眉批により知ることができる。ただ、湖南所蔵本については現在『關西大學所藏内藤文庫漢籍古刊古鈔目錄』ほか書籍目錄には見えず、所在を確認できない。また、同種の鈔本卷子本についても現在のところ探し當てることができない。

14，幼學指南鈔三十卷　殘本

『日本訪書志』には「日本古鈔本. 兩面鈔寫、蝴蝶裝、四邊外向。日本卷子以下此式爲最古。蓋北宋刊本裝式亦如此也。今存第三第四第九第十三第十四第十七第十八第三十。又三册殘本不知卷数、一寶貨部下一衣服部一音樂部。」とあり、これらは現在臺灣故宮博物院に楊守敬舊藏として保存されている[15]。

さて、現在の所藏狀況は『幼學指南鈔』（原裝影印古典籍覆製叢刊第３回配本　昭和 54 年）に付された川瀬一馬の解説に詳しい。内藤湖南の眉批の情報との對照表は次のページのとおりである。ただ丙寅十一月廿九日（昭和元年 1926 年 11 月 29 日）に『唐類函』および『太平御覽』校記から得た近衛公爵藏本に關しては卷一八および卷一九二〇からの引用であろうと思われるが表には入れていない。

ところで、湖南の書入れであるが眉批にとどまらず、『日本訪書志』の最終行に續けて「所引不止初學記鈔自祕府略諸書也」とあるのは『日本訪書志』の「蓋從徐堅初學記鈔出」とあるのに對する批判である。ここにも湖南の古籍に對する執念とも思えるこだわりが表れていよう。

以上、『日本訪書志』の書き込み狀況から内藤湖南の書籍蒐集の一端を垣間見てきたが、今回取り上げたのは鈔本のみであり、ごく一部を紹介したに過ぎず、十分檢討したとは言えない。

湖南書き込みのある『日本訪書志』については、現在公開準備を進めている段階で今年度中には公開されることが決まっているので、今後の研究に是非活用していただければと願い筆を擱くことにする。

公開情報：關西大學東アジアデジタルアーカイブ
https://www.iiif.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/books/about

10　宮内廳書陵部收藏漢籍集覽―書誌書影・全文影像データベース（https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_search.php）で書誌書影と全文影像を公開している。

11　「類編祕府圖書畫一元龜甲部殘七卷　存卷第七至第十三乙部殘十卷存卷第二十一至第二十九第三十一」請求記號：貴重書 XI-1-6-0

12　内藤湖南「寛政時代の藏書家市橋下總守」昭和三年五月二十日講演記錄

13　松平定信 1758-1829（宝暦８年-文政 12 年）の藏書印

14　資料請求番號：L23**C*2501

15　川瀬一馬「中華民國故宮博物院と國立中央圖書館藏の五山版とその他善本について」（書誌學 / 日本書誌學會 [編] (22), 24-42, 1971-07）

川瀬一馬		内藤湖南	楊守敬
目錄（現存不明）			
卷　一　天部上（前缺）	臺灣故宮博物院藏		
卷　二　天部下	大東急記念文庫（舊久原文庫）藏	天部（久原）	
卷　三　歲時部上下	臺灣故宮博物院藏		○
卷　四　地部上中	仝　右		○
卷　五　水部	大東急記念文庫（舊久原文庫）藏	水部（久原）	
卷　六　（現存不明）			
卷　七　人部一・二	並河氏舊藏	人部（並河氏）	
卷　八　人部三	竹栢園文庫舊藏		
卷　九　人部四	臺灣故宮博物院藏		○
卷一〇　（現存不明）			
卷一一　（仝　　右）			
卷一二　（仝　　右）			
卷一三　官職部上	臺灣故宮博物院藏		○
卷一四　理政部	仝　右		○
卷一五　文部	陽明文庫藏		
卷一六　式部	梅澤記念館藏		
卷一七　居處部	臺灣故宮博物院藏		○
卷一八　産業部	仝　右		○
卷一九　儀餝部・服餝部	大東急記念文庫（舊久原文庫）藏	儀飾服飾部（久原）	
卷二〇　服餝部・音樂部	臺灣故宮博物院藏		
卷二一　（現存不明）			
卷二二　巧藝部下・方術部・火部下	並河氏舊藏	巧藝方術火部下（並河氏）	
卷二三　寶貨部上	大東急記念文庫（舊久原文庫）藏	寶貨上（久原）	
卷二四　寶貨部下	臺灣故宮博物院藏		
卷二五　穀粟部・茱蔬部	大東急記念文庫（舊久原文庫）藏	穀粟菜蔬部（久原）	
卷二六　（現存不明）			
卷二七　草木部	大東急記念文庫（舊久原文庫）藏		
卷二八　獸部	成簣堂文庫藏		
卷二九　（現存不明）			
卷三〇　（鱗介虫豸）	臺灣故宮博物院藏		○鱗介虫豸類

（附）上記の並河氏舊藏となっているものは現在京都大學圖書館所藏[16]となっており京都大學貴重資料デジタルアーカイブで畫像公開されている[17]。

16　京大圖，４－８５／ヨ／１貴，マイクロ　書誌 ID 100385
17　https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00013250

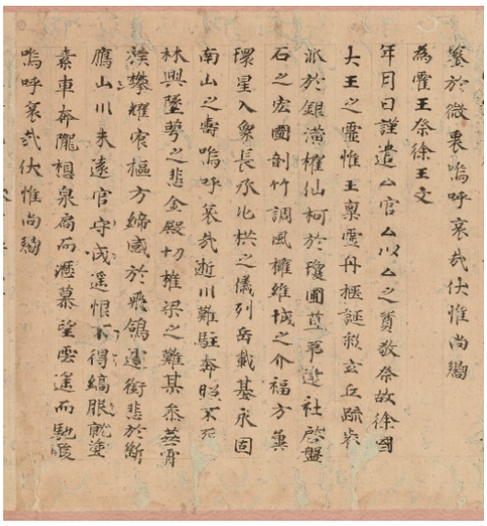
『王勃集』巻二十九をめぐる二つの疑問

―なぜ「爲霍王祭徐王文」を作ったのか。なぜ「常州刺史平原郡開國公行狀」は採錄されなかったのか。

道坂　昭廣

『王勃集』巻二十九には，1 篇の行狀と 6 篇の祭文が筆寫されている。この巻について，私は以前 Newsletter2 に「戻りそこねた一篇―『王勃集巻二十九』の祭文と神田家舊藏「祭高祖文」で紹介したことがある。今回この巻に關わる２つの作品についての疑問と假説を述べてみたい。どちらもなぜ王勃が作成を依頼されたのだろうかという疑問を出發點とする。

まず「爲霍王祭徐王文」に對する疑問を述べる。巻二十九に採錄される祭文は，すべて王勃が依頼を受けて作った作品である。誰の依頼であるか明示されており，概ね何時頃作られたかがわかる。そして王勃がなぜ作成を依頼されたかも理解できる。ただ「爲霍王祭徐王文」だけは，王勃の側にも霍王の側にも，關係を示す記錄がなく，なぜ霍王が王勃に祭文を依頼したのか分からない。湖南が「霍王元軌，高祖第十四子。徐王元禮高祖第十子。『新舊唐書』並有傳。元禮薨於咸亨三年，乃勃廿四歲時」（『舊鈔本王勃集殘卷跋（富岡氏藏唐鈔王勃集殘卷跋）』）と指摘するように，祭文の作成時期は明らかである。王勃の履歴に重ね合わせると，蜀から歸還したのち，虢州參軍となる前後のころである。



爲霍王祭徐王文

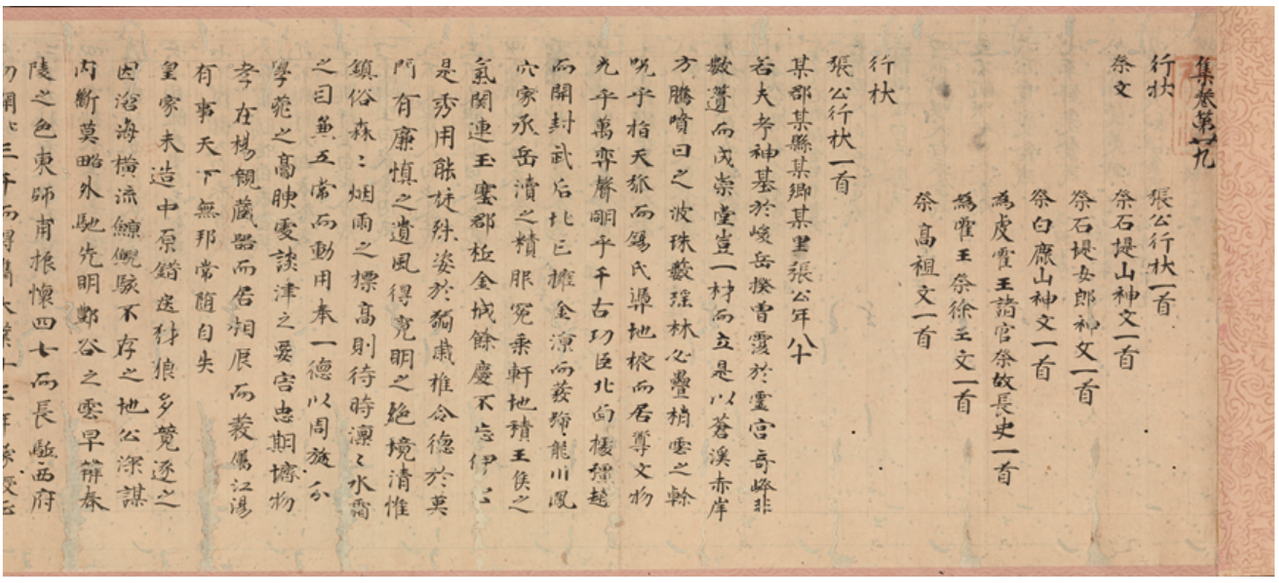
王勃は蜀滯在時期，縣令をはじめとするこの地の官僚や，彼と同じようにこの地を遊歷していたと思われる人物などと，その交友を廣げていた。そのような交友を示す詩序の一つに正倉院本 29『王子安集注』巻七「宇文德陽宅秋夜山亭宴序」がある。そこに「友人河南宇文嶠，清虛君子，中山郎餘令，風流名士」と，この宴の主催者である德陽縣の縣令宇文嶠とともに郎餘令の名前が擧がっている。郎餘令が何時まで蜀地にいたのかは不明である。王勃と同じ時期蜀におり，その後，長安や洛陽の近郊で病氣療養をしていた盧照鄰に郎餘令は『樂府雜詩』の序文を依頼している[1]。そして『舊唐書』巻一八九下・儒學下・郎餘令傳一三九下を見ると，「郎餘令，定州新樂人……餘令少以博學知名，擧進士。初授霍王元軌府參軍，數上詞賦，元軌深禮之。先是，餘令從父知年爲霍王友，亦見推仰。元軌謂人曰，郎氏兩賢，人之望也。相次入府，不意培塿而松柏成林」と，霍王に仕え，尊敬を受けていたという記錄があった。郎餘令は盧照鄰に侍御史賈言忠の文集『樂府雜詩』の序文を作らせたように，霍王に王勃を推薦し，祭文を作らせたのではないだろうか。

郎餘令は『冥報拾遺』（現在輯本が殘る）などの著作があったとされるが，すべて傳わらない。詩一首，他に「唐故尚書吏部郎中張府君墓誌銘」「大唐慈州□□□元善妻公孫氏墓誌」（ともに儀鳳四年）の二篇と「響堂山造像題記」（顯慶五年）が發見されているだけで[2]，現在では郎餘令の文學の内容や傾向は分からない。しかし彼は盧照鄰や王勃の文學を評價していたのではないか。彼らの文學は郎餘令のような新興知識人によって支持され，彼らの力で世に紹介されて知られるようになっていったのではないだろうか。「爲霍王祭徐王文」は，王勃の文學がどのような人に支持され，文名が高まっていったかを知ることができる作品と言えるのかもしれない。

巻二十九に「張公行狀」の一篇が載る。この行狀は途中から失われているが，巻頭の目錄でも行狀はこの一篇だけであり，『王勃集』巻二十八は墓誌下と題され墓誌のみが記錄されているので，『王勃集』には行狀が一篇しか採錄されなかったことになる。ところが蔣清翊注『王子安集注』には「張公行狀」はなく，行狀は「常

1　盧照鄰『樂府雜詩序』に「中山郎徐（餘）令，雅好著書，時稱博物。探亡篇於古壁，徵逸簡於道人，撰而集之，命余為序。」と郎餘令の依頼でこの文集の序を作ったことが記されている。

2　陳尚君『全唐文補編』では，この他に「朝散大夫著作佐郎中山郎餘令故妻趙國李道眞之墓」（垂拱三年）を擧げる。



卷二十九卷頭目録と張公行狀

州刺史平原郡開國公行狀」（以下平原郡公行狀と稱する）（卷 20）のみが載る。「平原郡公行狀」は『文苑英華』に採錄されており，傅增湘[3]が宋鈔本にすでに王勃の作とあったと記錄するので，早い時期より王勃の作った行狀として知られていたことが分かる。

「張公行狀」は貞觀二十一年の記事の途中で失われており，80 歳まで生きたこの人物を特定することはできない。一方平原郡公は麟德一・二年に世を去っているが，年齡はわからない。二人の履歷を行狀から抜き出してみよう。

張公は，大業 13 年唐の起義軍に參加。その後の戰いでは主に李世民の軍にいた。

武德 3 年劉師善，王世充らが反亂，張公は從わなかった。

貞觀 2 年に府長史，6 年麟遊縣令，12 年尚乘奉御，15 年大僕少卿，21 年將作少匠となっている。

平原郡公は，武德 3 年中將郎から秦王統軍。武德 5 年上柱國。

貞觀元年，望都縣侯，貞觀某年高昌行營総管，睦州刺史，松州都督，高麗遠征に參加。

龍朔年間に熊津道総管，廣州都督，平原公となる。

麟德元年常州刺史となり，その後間もなく死去。

ともに隋末唐初の戰亂に身を投じたことから履歷が

3　傅增湘撰『文苑英華校記』北京圖書館出版社,2006 年影印。

が始まる。このことから類推すると，二人にさほどの年齡差はなく，卒年も近かったのではないか[4]。二篇の行狀は，近い時期に作られたのもしれない。また作成時期が離れていたとしても，張公の官僚としての履歷は，平原郡公のように華々しいものではない。王勃の文集編纂にあたって，張公の行狀を採錄しながら，より高位の官僚であった平原郡公の行狀を編者が知らなかった，また採錄を忘れたとは想像しにくい。

「平原郡公行狀」に「自星虹沓祉，開寶曆於軒圖，雷電窈冥，載休徵於魯讖。龍驤鳳起，霸圖存玉壘之雲，紫蓋黃旗，王迹著金陵之野。」とあることから，蔣清翊は劉姓の人間と推測していたが，平原郡公は劉德敏という人物であった[5]。その後，調べてみると彼の娘の墓誌

4　清：嚴如熤等『（嘉慶）漢中府志校勘』（三秦出版社　2021 年）卷十一「秋官・武職」「唐，梁州都督府……劉德敏」に對して，校勘者郭鵬氏は「據「唐書」，麟德元年初，劉德敏因功授正三品廣州都督，封爵平原郡開國公。後朝廷考慮到他年事已高，當年改授正三品金紫光祿大夫行常州刺史。不久劉逝於任上，享年近八十歲，朝廷贈劉梁州都督。可見，此非實職。」とする。ただ，平原郡公が約 80 歳で世を去ったとする根據はわからない。

5　劉德敏は『新唐書』卷二本紀第二太宗の貞觀九年の條に西域遠征軍の指揮官の一人として，また「唐左屯衛將軍姜行本高昌勒石文」にも名前がでる。平原郡公が劉德敏であることは，宇佐美文理先生が主催し，吉川忠夫先生を圍む「王勃讀書會」において陳佑眞先生に教えられた。記して感謝を申し上げる。

「大唐監察御史裴炎故妻劉氏墓誌銘」(『唐代墓誌彙編・續集』(顯慶〇四三) が出土していた。「曾祖軫，齊諫議大夫高平太守。祖子將，齊和州刺史……父德敏，見任潭州都督望都縣開國公。」と言う墓誌の記述に従えば、彼の家系は北齊由來の高官の家であり,『舊唐書』卷七七・列傳第二七,『新唐書』卷一〇六・列傳第三一に立傳されている劉德威は彼の兄に當ると考えられる[6]。德威は太宗の信任を得，妻の鄭氏の没後，平壽縣主が嫁いでいる。劉德敏も行狀をみるに，高級官僚と言ってよかろう。彼が世を去った麟德一・二（664・665）年，王勃は 15・16 歳，まださほど文名を得ていない頃であり，張公はもちろん，高官であった劉德敏の「故吏親舊」[7]というほどの經歷もなかった。劉德敏の家がなぜ王勃に行狀の作成を依頼したのか，そもそも依頼する必要があったのだろうかという疑問に加えて，なぜ『王勃集』に採錄されなかったのかという疑問も強まる。ひいてはこの行狀は王勃が作った作品ではなかったのではないかという疑問さえ浮かびあがってくる。「平原郡公行狀」は，典據の多用，對句の構造，平仄の配置も整った優れた駢文作品であることは間違いない。そこで，この行狀の表現と王勃の他の作品の表現の類似に注目して調べてみた。

まず同じジャンルである,「張公行狀」と比べてみた。

「平原郡公行狀」「餘慶不忘,仁義應千齡之運」は「張公行狀」にも「**餘慶不忘**，伊□是秀」とあった。どちらも「餘慶」を先祖の善行が積み重なって劉德敏や張公が幸福を得たという文脈で使われている。

「雖有黄槐紫棘，無以易堯，盛嶽名都，猶聞借寇」も「知人則帝,實思專對之臣,**無以易堯,**頻授當仁之寄。」と同じ句がある。

「攀鳳羽於九霄，候龍顔於千里」は「**攀鳳翼於**蕭王，識**龍顔於**代邸」と似た構造の對句がある。

「故得虬驟蠖屈，服冕乘軒」は『左傳』哀公十五年「大子與之言，苟使我入獲國，服冕乘軒，三死無與」を典據とするが、「張公行狀」にも「龍川鳳穴，家承岳瀆之精，**服冕乘軒**，地積王侯之氣」と同じ句がある。

他のジャンルであれば,「豈非時不可以苟遇，道不可以虛行」は「上拜南郊頌表」(卷四) に「**時非苟遇**，懷雅頌而知歸，**道不虛行**，想謳歌而有志」と類似する對句がある。

「聖人作而萬物覩，神功資而百寶用」は「上絳州上官司馬書」(卷五) に「**聖人生而萬物覩**，太階平而四國會」という表現がある。ただしこの句も『周易・乾』「雲從龍，風從虎，聖人作而萬物睹」を典據とする。

「自星虹杳祉，開寶曆於軒圖，雷電窈冥，載休徵於魯讖」は「九成宮頌」(卷十三) に「**星虹杳祉**，電（英華一作雷）虯發慶」と類似した對句がある。特に「星虹杳祉」句は，私はこの二作品以外他に使用例を見つけられない。

「折旋儒館，以六藝為笙簧」は「夫子廟碑文」(卷十五) の「筐篚**六藝**，**笙簧**五典」が類似する表現と言えよう。

「九縣平夷，瑤水流尋仙之駕」は「上九成宮頌序」(卷十三)「時既貞矣，襄城辭訪道之遊，功既成矣，元圃頓**尋仙之駕**」と同じ表現が句の一部にある。

「象物而動，鼓鼙肅戰士之容」と「三軍獻捷，諸將論功」はともに「拜南郊頌」(卷十二) に「國容**象物而動**。朝章視令而肅」「望神都而**獻捷**。仰靈社以**書功**」と同じ句，また對を構造の一部に類似する表現がある。

「薤本誅強，姦豪屏氣」は「梓州郪縣兜率寺浮圖碑」(卷十七)「榮高銅墨，任屈弦歌，浹辰而風化大行，踰月而**姦豪屏氣**」と同じ表現がある。

もちろん,「故得戰無全陣，野靡堅城」が『隋書』卷四十列傳五・宇文忻の「公擧無遺策，**戰無全陣**，誠天下之英傑也」や『陳書』卷一本紀一・高祖上の徐陵「陳公九錫文」「公龍驤虎步，嘯吒風雲。**山靡堅城，野無彊陣**」といった比較的近い過去の表現を踏襲している例もある。しかし以上のように王勃の他の作品に類似した表現を見つけることが可能であり,「平原郡公行狀」が，王勃の作品ではないとする積極的な理由はない。

王勃がなぜ劉德敏の行狀を作ったのかという疑問は，現在のところ手がかりがない。なぜ卷二十九にこの行狀が採錄されなかったのかという疑問について考えてみたい。

劉德敏は先に述べたように史書や碑文に名前が出るが，本行狀以上に精しい史料は發見できない。ここで先に紹介した劉敏德の三女の墓誌をもう一度取り上げてみよう。彼女は，裴炎に嫁いだが，顯慶 5（660）年に亡くなった。彼女の墓誌は夫である裴炎自身が作った。裴炎は『舊唐書』卷八七・列傳第三七,『新唐書』卷一一七・列傳第四二に立傳されている。それによると，彼は武后の政權奪取に協力し，宰相にまでなったが，徐敬業の亂勃發に際し，實權を皇帝に返すよう武后に進言して不興を買い，それが原因となり處刑された。『舊唐書』ではその年を光宅元年（684 年 9 月，文明元年を改元）とする。劉德敏は彼女の死後，5 年ほど生きてい

6　『舊唐書』劉德威傳は「徐州彭城人也。父子將，隋毘陵郡通守」とする。

7　『文體明辨・序説』によると「行狀」は「而其文多出於門生故吏親舊之手」と言う。

たと思われるが，裴炎と交流があったかどうかはわからない。また裴炎の處刑は彼が世を去って約 20 年後のことである。この間の劉德敏の遺族と裴炎の關係も分からない。ただ『新・舊唐書』に立傳されている兄，劉德威の傳に少し氣になる記述があった。兩『唐書』ともに劉德威の傳記のあと，德威の子審禮の傳が續く。さらにその後に「審禮從父弟延嗣」(『新』は「從弟」とする）なる人物の短い傳がある。劉延嗣は文明年潤州司馬であった。徐敬業の亂が勃發すると，彼は反亂に同調しなかったため徐敬業軍に捉えられ，亂平定後救出された。武后に忠信を示したのであるが，「竟裴炎近親，不得叙功」(『新』は「以裴炎近親，裁遷梓州長史」とする）であったという。劉德敏の子供は，裴炎に嫁いだ娘以外わからないが，この延嗣は，劉德威の子の「從父弟」であり，かつ「裴炎近親」であるとするので，德敏の子供ではないか [8]。そして記事にある劉延嗣の不遇は，『王勃集』編纂の時期と重なる [9]。劉德敏の行狀はその子等によって依頼されたのであろうから，彼の行狀を採錄しなかったのは，劉德敏の子供達，卽ち依頼者と裴炎の關係から，『王勃集』の編者たちによって忌避されたと想像できないだろうか。もし劉德敏の行狀を，故意に採錄しなかったのであれば，そのことは逆に『王勃集』編纂時期を確定する一つのヒントになる。

卷二十九に關わる二つの作品について，想像を連ねた。王勃がなぜ霍王に祭文を依頼されたのかという疑問については，蜀地で知り合ったと思われる郎餘令の推薦があったのではないかと想像した。もちろん彼が王勃を霍王に紹介したというのは，私の推測であるが，少なくとも彼は盧照鄰の文學を認めた人物の一人であり，王勃たちの文學を支持した新興知識人たちのネットワークのなかに郎餘令がいたことは間違いない。王勃や盧照鄰の文學が評價され，併稱されてゆくのは，當時朝廷にあった高官や貴族ではなく，王勃らと同じ士人階層の人々の支持であった。祭文は王勃の文學を代表する作品群ではないが，王勃らの文學が世に知られるようになってゆく過程を語っていたのかもしれない。

「平原郡公行狀」は，なぜ王勃が作ったのかという疑問とともに，この行狀がなぜ『王勃集』に採錄されなかったのかという疑問も付隨していた。前の疑問は結局解消できなかったが，後の疑問については，少し想像を巡らせることができた。平原郡公（劉德敏）その人ではなく，王勃に行狀の作成を依頼した劉德敏の遺兒たちに對する政權の視線に配慮し，故意に採錄しなかったのだというのが想像による結論である。もし政權に配慮したのであったとするなら，『王勃集』編纂の時期を徐敬業の亂の平定後間もなくとする説を補強することができよう。

『正倉院藏王勃詩序』は，彼を取り卷く新興士人たちの存在と王勃文學に對する彼らの共感を示す作品群であった。それに對し卷二十九「爲霍王祭徐王文」は，新興士人の文學評價が支配層にも認知されつつあったことを示す。一方で「平原郡公行狀」が文集に採錄されなかったことは，政權の動向に敏感にならざるを得なかった彼らの政治的基盤の弱さを示している。二作品は，初唐の新興士人の文學と社會における立場を示しているのかもしれない。

＊圖は東京國立博物館所藏『王勃集卷第二十九・三十』(TB-1203)　e-國寶を利用した。
https://emuseum.nich.go.jp/detail?langId=ja&webView=&content_base_id=100228&content_part_id=0&content_pict_id。許可下さいました東京國立博物館に感謝申し上げます。

8　兄德威の子で平壽縣主が生んだ子供は「延景」とあり，德威・德敏の子の世代は「延」の字が使われたのではないか。

9　『王勃集』の編纂時期について傅璇琮氏は垂拱元年（685）頃とする。私は日本に殘る『王勃集』は垂拱二年以降載初元年（689）までに筆写されたと考えている。詳細は「『王勃集』の編纂時期―卷三十所収「族翁承烈致祭文」を中心に―」(『『王勃集』と王勃文學研究』）を参照。

活動記録 1

東洋文庫調査

昨年度に續き 2022 年 5 月 11 日、11 月 9 日の 2 回、公益財團法人東洋文庫にて所藏古寫本を調査した。參加者は高田時雄、髙橋智、玄幸子、道坂昭廣の他、文化庁：國立現代建築資料館田良島哲、閲覧が叶った典籍は『古文尚書』、『毛詩』、『春秋經傳集解』、『文選集注（卷四十八、五十九、六十八、一百十三）』『古文尚書』、『韻鏡』、『中庸［章句］』、『史記（夏本紀第二、秦本紀第五）』、『禮記正義』である。前回と同じく東洋文庫圖書部、山村様清水様をはじめスタッフの皆様には大變お世話になりました。重ねて感謝申し上げます。

活動記録 3

天理圖書館開館 92 周年
記念中國古典名品展參觀

11 月 12 日開催中の表記展覽會を參觀した。所藏古刊本とともに、『南海寄歸内法傳』、『趙志集』、『古文孝經』など古寫本を見ることができた。參加者は、高田時雄、髙橋智、田良島哲、永田知之、藤井律之、道坂昭廣、玄幸子（別日程）である。

活動記録 2

史跡足利學校調査

2022 年 12 月 12、13 日の兩日、史跡足利學校所藏の典籍を調査した。參加者は高田時雄、道坂昭廣。閲覧が叶った典籍は『周易（王注）』、『周易（王弼・韓康伯注）』、『周易傳（李中正）』、『古文尚書』、『毛詩鄭箋』（二種）、『禮記』、『論語義疏』である。調査に際しては、大正期に建設された遺蹟圖書館内の一室を提供していただいた。また奈良様、學藝員の方々にいろいろお教え戴くことができた。お忙しいなか對應いただいた立野所長はじめ足利學校の皆様に心より感謝申し上げます。

活動記録 4

「第六届漢文寫本研究学術論壇暨中國典籍日本寫本文献研究」の共催

2022 年 12 月 10 日、中國天津師範大學漢文寫本工作坊、中國天津師範大學文學院と上記學會を共催した（協力は鄭州大學漢字文明研究中心・江蘇鳳凰出版社）。會議は騰迅網を利用した Web 形式で實施した。

學會は中國時間午前 8 時半より行われ、開幕式において道坂が、本研究の趣旨、目的及び進行狀況を紹介した。續く全體報告では高田時雄、道坂が、午後の全體報告では髙橋智が發表をおこない、午後 6 時すぎ、會議を終了した。

學會は本研究より廣範なテーマ、予定より大規模なものとなったが、國際的な情報發信という本研究の目的が新型コロナウィルス流行のため充分に展開できないなか、貴重な機會となった。科研メンバー三名の發表及び質疑は中國語で行われた。Newsletter の本號は、主としてこれらの發表内容に基づいたものである。

活動記錄 5

中國典籍日本古寫本 DB

本研究が 2013 年 4 月から 2018 年 3 月に實施された「中國典籍日本古寫本の研究」（代表者：高田時雄）の成果を引き繼いでいることは、「Newsletter V」(2019 年 11 月）でも紹介しておいた。なかでも上記データベースの構築は重要項目として繼續して取り組んできた。高田科研において定義した中國典籍古寫本の情報收集に努めてきたが、新型コロナウィルス流行の長期化という情況下に、本科研のメンバーは繼續して國寶、重要文化財を中心に 50 點餘の典籍を調査し、既存の記錄を確認修正するとともに、これらの情報をデータベースに反映させてきた。以下の圖は「中國典籍日本古寫本」データベースで『古文尚書』を檢索した結果の一部である。本データベースのデザインは當初より高田時雄が中心となりブラッシュアップを行ってきた。正確を期すため、高田による説明を引用する。「この檢索結果は、右側に續くフィールドが切れてしまっているが、寫本の容態及びサイズ、所藏機關、參考文獻、複製の有無などが含まれる。現在、分擔者の安岡孝一に設計を委ね、一次檢索では文獻名稱、書寫年、所藏、分類のみを出し、二次檢索で更に詳しい情報が出るように檢索インターフェースの改良を進めている。」

本研究グループでは、DB の正式公開に向け引き續き調査と作業を進める計劃で、是非ご支持、ご指導をお願いしたい。

中國典籍日本古寫本DB

分類	四部分類	類目	文獻名稱	存卷（册數・軸數）	紙背	
国寶	經	書	『古文尚書』卷第三、第五、第十二、	一卷	元秘抄	{700}中國：唐時代（七世紀
国寶	經	書	『古文尚書』卷第六	一卷	元秘抄	{700}中國：唐時代（七世紀
重文	經	書	『古文尚書』	十三卷		{1314}鎌倉時代/正和元年（
重文	經	書	『古文尚書』卷第十一	一卷		{1332}鎌倉時代
重文	經	書	『古文尚書』卷第六義題「漢孔安國傳」	一卷	新札往來書寫/室町初期？	{1330}元德二年（1330）七
重文	經	書	『古文尚書』（足利學校藏本）	一册		{1572}室町中期
重文	經	書	『古文尚書』（足利學校藏本）	二册		{1867}江戸初期
	經	書	『古文尚書』十三卷	一册		{1867}江戸初期
	經	書	『古文尚書』卷第四	一軸		{1355}文和三年（1355）
	經	書	『古文尚書』卷第十一	一軸		{1323}元亨三年（1323）
	經	書	『古文尚書』卷第十一	一軸		{1332}鎌倉末期
12	經	書	『古文尚書』十三卷	四册		{1819}文政二（1819）
13	經	書	『古文尚書』十三卷	三册		{1603}慶長八（1603）

科研スタッフ紹介

研究代表者：
道坂昭廣（京都大學大學院人間・環境學研究科）
研究分擔者：
高田時雄（京都大學名誉教授）
髙橋　智（慶應義塾大學文學部）
玄　幸子（關西大學外國語學部）
安岡孝一（京都大學人文科學研究所）

中國典籍日本古寫本の研究　ニューズレター　No.8
2023 年 3 月 23 日發行
編集・發行　京都大學大學院人間・環境學研究科
科學研究費助成金・基盤研究（B）
中國典籍日本古寫本研究の精密化と國際的情報發信
〒606-8501　京都市左京區吉田二本松町
構成　成　高雅（京都大學大學院博士課程）
印刷　中西印刷株式會社